HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書
Citation	1-183 (2013). 北海道大学医学部アイヌ人骨収蔵経緯に関する調査報告書. 北海道大学
Issue Date	2013-03-21
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/82908
Rights	本報告書の著作権は北海道大学にあります
Type	report
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	hokkaidoU_report_201303_Part3.pdf (Part3)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

静内町は、1972年に豊畑共同墓地（静内町字豊畑417番地）を、現在地（新ひだか町静内豊畑341、343の２番地）に移転改葬した[139]。1972年の改葬に際して、改葬工事請負業者が作成したと考えられる「旧豊畑墓地移転改葬工事平面図」には、294基の墓が図示してあり、そのうち274基の「無縁土葬」墓には番号が付してある。和人墓地の98基のうち「無縁土葬」墓は86基、アイヌ墓地の196基のうち「無縁土葬」墓は188基であった[140]。静内町はこれらを現豊畑墓地へ移転改葬したのである。

解剖学第一講座の「日誌」から、静内町に関連した記述を摘記すれば、以下のようである。

〔1971年〕９月10日（金）　松野prof、兼重〔達男、教務補助員〕さん静内へ出張
明日帰る予定
９月11日（土）　雨、松野prof、兼重さん静内より今日帰札予定。
９月26日（日）　松野prof、静内へ出張
９月27日（月）　松野prof、お休み
11月19日（金）　松野先生、兼重さん、梅田〔秀夫、技官〕さん、三井君（二年目）で静内へ発掘の為出張。天気も良く、良い成果を得られた事を期待して居ます。
11月20日（土）　松野先生お休み。発掘でお疲れになったのか。
〔1972年〕４月27日（木）　松の〔松野正彦〕先生、静内へ出張
４月28日（金）　松の先生出張より帰られず、今日欠席との事
６月29日（木）　静内発掘調査は７月16日～７月24日と決定。
７月12日（水）　16日から松の先生出発。17日に兼重〔達男〕先生、菅野〔吉一〕先生出発
７月13日（木）　発掘準備完了。松の先生に旅費が出ました。
７月17日（月）　土曜日に発掘のための送こう会を行なう。
日曜日に松の先生出発。
今日、兼重先生、菅野先生、堀口さん出発。
７月21日（金）　仲西先生と静内へ向かう。
７月25日（火）　日曜日、松の先生を残し全員帰札。

「日誌」における1971年11月の「静内」出張記録は、「豊畑」と記述してはないが、四肢骨を包んでいた新聞紙の記載「豊畑試掘　№１　昭46」、「豊畑試掘　№２　昭46」の時期と一致する。1972年の「静内」出張記録は、豊畑共同墓地改葬が1972年であること、頭蓋骨に付随していた紙片（ラベル）裏面の記載「昭和47年７月調査」と符合する。墓地改葬に際して、解剖学第一講座が1971年、1972年７月16日～７月24日にアイヌ人骨を発掘・収蔵した証左である。

松野正彦はアイヌ人骨を発掘して医学部に収蔵しながら、32体を発掘した年月日、発掘墓の位置、副葬品その他埋葬・発掘状況の記録を講座に残していない。豊畑共同墓地発掘のアイヌ人骨が、アイヌ納骨堂内の四肢骨箱に混在していた事情を説明できる資料も見当たらない。

上記の事態を引き起こしたのは、松野正彦が医学部長在職中の1977年に急死したことが要因のひとつである。1978年以降、研究テーマを神経解剖学へと転換した解剖学第一講座（井上芳郎教授）は、豊畑発掘の32体を３箱に入れたまま保管し、３箱内を確認せずに1984年にアイヌ納骨堂へそのまま移送したものと考えられる。

（２）　解剖学第二講座のアイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵

戦後において、解剖学第二講座（1929～1959年：児玉作左衛門教授、1959～1971年：伊藤昌一教

授）が行ったアイヌ墓地発掘・アイヌ人骨収蔵とアイヌ人骨計測研究は、以下のようである。

①平取町長知内発掘（1952年）

発掘人骨台帳の単頁複写物75頁には、「日高国　長知内」として、発掘番号・年代・性別欄に、「長知内１／老年／女」、「長知内２／成年／男」、「長知内３／成年／〔空欄〕」と記載がある。備考欄は、３体をとりまとめて、「27年11月27日、平取村字長知内ニテ発掘／大場持参」と記載されている。「大場」とは、解剖学第二講座講師の大場利夫である。発掘者を大場利夫と特定することはできないが、1952年に沙流郡平取町長知内における発掘に解剖学第二講座が関与したことは明白である。

アイヌ納骨堂には、「長知内１」・「長知内２」・「長知内３」の頭蓋骨がおさめられている。

発掘経緯の記載はなく、発掘地は「長知内」とある以外は不詳である。

長知内発掘のアイヌ人骨を資料とした研究発表は、大場利夫の学位請求論文「日高アイヌ頭蓋の人類学的研究」（1955年３月７日医学博士（旧制）取得）、それを刊行した大場利夫「日高アイヌ頭蓋の人類学的研究」（『北方文化研究』第７号、1974年３月）である。前者の９頁、後者の67頁に、資料とした「長知内」の３体を含む沙流郡・浦河郡発掘アイヌ人骨37体の一覧が載っている[141]。

②根室市発掘（1954年）

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」84頁の「根室４」・「根室５」の備考欄には、「昭和二十九年七月十四日大場発掘／七月十七日持参」と記載がある。解剖学第二講座講師の大場利夫が発掘した人骨である。年代・性別・発掘状態欄には、それぞれ「成年／男／〃」、「老年／女／〃」と記載されている。「〃」は「副葬品アリ」を意味している。

「根室４」・「根室５」の頭蓋骨はアイヌ納骨堂におさめられていたが、「根室５」の四肢骨は古人骨中に混在していた。四肢骨箱は「根室（Ｓ29.7.17）　虻田石器時代２　虻田石器時代１」と表記があり、箱内の紙片には「根室５／Ｓ.29年７月17日／大場持参　♀」と記載がある。古人骨に混在した経緯は不詳である。

発掘経緯の記載はなく、発掘地は「根室」とある以外は不詳である。

上記の２体あるいは１体を資料とした研究発表には、伊藤昌一「アイヌ頭蓋の地方的差異―計測所見―」（『北方文化研究』第２号、1967年３月）がある。これは、1964年５月５日、第69回日本解剖学会総会において、「頭蓋から観たアイヌの地方相」として講演したものである。

③岩内町発掘（1956年、1957年）

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」70頁の「岩内２」・「岩内３」・「岩内４」の備考欄には「昭和31年10月　大場発掘」、「岩内５」の備考欄には「昭和32年７月25日　大場発掘」と記載がある。年代・性別・発掘状態欄には、それぞれ「成年／~~男~~女／完形　四肢骨アリ」、「老年／女／〃」、「成年／男／〃」、「成年／女／〃」と記載されている。「〃」は「完形　四肢骨アリ」を意味している。

アイヌ納骨堂には、「岩内２」・「岩内３」・「岩内４」・「岩内５」の頭蓋骨がおさめられている。

「岩内５」の頭蓋骨箱内の紙片には、「岩内５／昭和32年７月25日／岩内東山にて大場発掘」と記載がある。解剖学第二講座講師の大場利夫は、『日本考古学年報』10（昭和32年度）に、「東山遺跡において道路開鑿中に発掘した人骨は４体あるが、これは遺跡と関係なく、近年において北海道アイヌの埋葬されたものである」と記している。上記の岩内町発掘４体は、岩内遺跡（東山地区）発掘の４体と考えられる[142]。

岩内町発掘のアイヌ人骨を資料とした研究発表は見当たらない。

④静内町静内駅前共同墓地発掘（1956年）

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には、38～44頁にかけて、「日高　静内」として「静内１」～「静内166」の年代・性別の記載がある。１体は「不在葬」（骨格がない場合）である。４体には頭蓋骨が「なし」との書き込みがあり、その内２体は発掘状態欄に「四肢骨のみ」と書き込みがある。

アイヌ納骨堂には、静内発掘の頭蓋骨161体と四肢骨がおさめられている。

解剖学第二講座が発掘した「日高　静内」は、「静内駅前共同墓地」であり、同講座が「人骨の学術調査」を担ったことは、以下に掲げる『静内町史』によって明らかである。

> この墓地〔静内駅前アイヌ墓地〕は、静内町の都市計画にもとづいて、昭和三十年から三十一年にかけて、新設の駒場墓地に移転改葬されたもので、日本人墓地に隣接していた。日本人の縁故墓地は昭和三十年度において改葬は完了していたが、アイヌ墓地の方は、全部が無縁故であった。この無縁故アイヌ墓地を、昭和三十一年八月から十月に移葬したが、その作業は、静内町、北海道大学医学部第二解剖（責任者児玉作左衛門教授）、日高郷土史研究ケパウの会、静内高校郷土研究部の四団体が行ない、人骨の学術調査は、北大医学部が担当して、現在なお進行中である[143]。

中田幹雄（静内高等学校郷土研究部員）は、「アイヌ墓地発掘について」（『北海道地方史研究』第22輯）において、静内駅前共同墓地発掘経緯の概略を、以下のように述べている[144]。

〔１〕静内町都市計画にもとづき、静内駅前共同墓地の駒場墓地への移転改葬が、1956～1957年に行われた。墓地面積は約1.8町歩で、そのうちアイヌ墓地はおおよそ半分である。

〔２〕第一次調査（1956年８月上旬）で10体、第二次調査（1956年９月下旬）で151体を発掘した。

〔３〕和人墓地の改葬は809件で、アイヌ墓地の改葬は皆無である。

〔４〕「聞き込み調査」によれば、駅舎（開業は1926年）・日通事務所・鉄道の工事中に多くのアイヌ人骨が出土しており、アイヌ墓地面積は相当広かったと思われる。

〔５〕静内高校郷土研究部は、北大医学部解剖教室の調査に協力参加し、発掘・埋葬状況・副葬品調査を担当した。

なお、中田幹雄は、「重葬」の人骨・副葬品スケッチを添えている。また、掲載誌冒頭口絵には「親子らしい二つの棺」、「埋葬してあるところは土が混乱しているため処女層と区別出来る」、「発掘された遺骸の１例」とキャプションを付した写真を載せている。

斉藤庚八は、論文で次のように述べている。

> ……1956年北海道静内郡静内町において９月26日より10月５日の10日間に160余体のアイヌ骨格を発掘することができた。しかも、骨格の保存状態は良好であり、人類学的調査に使用し得るものも100余体という誠に貴重なる資料である。……本資料は明治末期まで使用されていた旧アイヌ墓地のものであり、墓地の所在地は現在の日高線静内駅につづいた小丘陵地帯であり、静内駅開設の際の工事中にも人骨が多数出土したといわれる。しかし当墓地の詳細なる記録は明らかでない。……〔発掘は〕本学解剖学教室員を主体とし、土地の教員養成所生徒、高校の教員及び生徒、人夫の援助の下に行われた[145]

松野正彦・加藤三郎は、「余等は1956年秋北海道日高国静内町におけるアイヌ墓地発掘によつて得た多数の頭蓋を調査する機会を得た」と論文に記しているに過ぎない[146]。斉藤庚八・松野正彦ら解剖学第二講座関係者による記述の粗さは、中田幹雄の記述とは比較するまでもない。

教室日誌の「解剖学第一講座（記録）」において、静内駅前共同墓地に関係していると考えられる記述は以下のようである。

〔1956年〕８月17日　松野先生、下山〔広治、助手〕先生　静内え（ママ）出張

8月21日　松野、下山両先生帰校
9月26日　松野、中根〔文雄、講師〕、下山、山口の四先生は静内え出張
10月1日　水野先生、大友、静内え出張（第二班）　アイヌ墓地発掘調査のため
中根、下山先生　帰校
10月2日　岸本先生　静内え出張
10月6日　松野先生、水野先生、大友は多大の収穫をおさめて帰札
〔1958年〕1月27日　児玉教授、松野助教授、中根助教授、山口〔和夫、助手〕先生の4人で於食堂
静内アイヌの男女性別判定さる[147]

「多大の収穫」はアイヌ人骨166体（内、不在葬1体）を指していた。

その後、松野正彦のもとで、野帳（フィールド・ノート）をもとに発掘人骨の整理・研究が行われ、静内発掘№1～№166の整理リスト《資料51》が作成された。整理リストでは、「整理№」として新規番号（大半が枝番号で、発掘番号と異なる）が1体毎に与えられた。その整理番号が、四肢骨の包み紙や四肢骨箱に表示されることとなった[148]。

静内駅前共同墓地発掘のアイヌ人骨を資料とした論文は、表17のとおりである。

表17　静内駅前共同墓地発掘アイヌ人骨を資料とした論文一覧

№	発表名等
1	松野正彦・加藤三郎「静内アイヌ頭蓋における前頭・側頭骨連接について」、『北大解剖研究報告』第82号、1958年2月
2	松野正彦・岸本総一郎「静内アイヌ頭蓋における翼上骨について」、『北大解剖研究報告』第101号、1958年9月
3	中根文雄、吉田鉄夫「静内アイヌ頭蓋における眼窩下孔について」、『北大解剖研究報告』第112号、1958年12月
4	伊藤正彦「静内アイヌ頭蓋における歯牙発育異常の研究」、『北大解剖研究報告』第149号、1959年12月
5	斉藤庚八「静内アイヌ頭蓋における歯牙の硬組織変化」、『北大解剖研究報告』第157号、1960年2月
6	松野正彦「アイヌの頭蓋容積について」（日本解剖学会第6回東北・北海道連合地方会講演）、『解剖学雑誌』第35巻第6号、1960年12月
7	松野正彦、加藤三郎、加藤和雄「静内アイヌの頭蓋容積について」、『北大解剖研究報告』第162号、1960年12月
8	松野正彦・菅野吉一・兼重達男「日高アイヌ頭蓋における前頭・側頭骨連接について」（日本解剖学会第19回東北・北海道連合地方会講演抄録）、『解剖学雑誌』第48巻第6号、1973年12月
9	Sakuzaemon Kodama and George Kodama, “Studies on Artificial Injuries in Shizunai Ainu Skulls”, 『北方文化研究』第2号、1967年3月〔児玉作左衛門・児玉譲次「静内アイヌ頭蓋における人為的損傷について」〕
10	松野正彦・武田充弘「下顎骨の人類学的研究――静内アイヌの下顎骨について」（日本解剖学会第22回東北・北海道連合地方会講演抄録）、『解剖学雑誌』第51巻第6号、1976年12月

1960年に松野正彦が解剖学第一講座教授に就いたことに伴い、これらの静内駅前共同墓地発掘のアイヌ人骨は解剖学第一講座において保管されることとなった。解剖学第一講座では、松野正彦が1977年に急逝した後も、静内駅前共同墓地発掘のアイヌ人骨を保管していた。

なお、1982年に海馬沢博から静内駅前墓地発掘は盗掘だと批判された医学部は、発掘に携わった医学部解剖学第二講座の技術職員から、1956年当時の事情を1982年4月6日に聴取した。その際の聴取記録[149]の全文は、下記のとおりである。

1、発掘作業は、当時の本学部第2解剖学教室松野正彦助教授（52.5.6逝去）が責任者となり

現地の関係機関（町役場）等からの要請により、まず、下調べを行い、その後本格的な発掘作業を行うのが通例であった。勿論それには、道教委等関係機関において適正な手続きを経、許可を得た上で実施したものであり、盗掘では絶対にあり得ない。

1、現場は、明治末期まで使用されていた旧アイヌ墓地であったようだが、当時は墓地ではなかった。他の場所に正規の墓地があった。

1、発掘の前後にはアイヌ式による慰霊祭を現地の長老等関係者を招待し実施した。

1、発掘した人骨、埋葬品については、本学部と関係機関と協議した上で大学に持ち帰ったもので、独断で持ち帰ったような事は絶対にない。特に埋葬品については、関係機関が厳重にチェックし処理されており大学に持ち帰ったものは関係機関が引取らなかったもの（極少数）を大学が保管すると云うことで現在厳重に保管されている。

⑤千歳市墓地発掘（1958年）

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」57頁には、「千歳墓地発掘」として、「千歳（墓）1」～「千歳（墓）20」の発掘番号が記載されている。年代・性別・発掘状態欄は空欄だが、備考欄には「第一解剖保管」と記載がある。

アイヌ納骨堂には、「千歳（墓）1」～「千歳（墓）20」と表示がある頭蓋骨箱に、それぞれ1体がおさめられている。「千歳（墓）4」、「千歳（墓）16」の箱内には、それぞれ「58／9.17」、「58／9.20」と記載された紙片（茶封筒）がある。

教室日誌である「解剖学第一講座（記録）」より、千歳墓地発掘に関連した記述を摘記すれば、以下のようである。

〔1958年〕8月29日　松野助教授　関寺　千歳墓地発掘調査の為出張
9月13日　千歳墓地発掘　3体
〔発掘従事者〕松野、中根、鎌田、加藤、田川、関寺、竹内
9月17日　千歳発掘　6体
〔発掘従事者〕松野、中根、加藤、関寺、竹内、他人夫3名
尾形、鈴木先生来る
9月19日　千歳発掘　1体
9月20日　千歳発掘　10体

日誌からは、千歳における発掘は、1958年9月13日～9月20日に、解剖学第二講座助教授であった松野正彦が中心となって行ったことが判明する。「千歳墓地発掘」と記述はあるが、発掘場所を特定できる資料は見当たらない。千歳墓地の発掘経緯については、千歳市史編さん委員会編『千歳市史』（千歳市、1983年）等の自治体史にも記載は見当たらない。

なお、千歳墓地で発掘したアイヌ人骨を資料とした研究発表も見当たらない。

⑥帯広市伏古共同墓地発掘（1963年）

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」の79頁には、「帯広」として、「帯広1」～「帯広19」の記載がある。年代・性別・発掘状態欄の記載もある。備考欄には「38年帯広市西帯広で工業団地建設現場より出土」、「伊藤教授、児玉名誉教授、児玉譲次氏ら11月21日―同24日調査し採集」と記載がある。これは、解剖学第二講座が帯広市伏古共同墓地で発掘した19体についての記載である。

一方、『西帯広郷土史』は以下のように記している。

昔からの六号南一丁目のアイヌ墓地は七反歩あり、新らしいアイヌ墓地は西二一条北一丁目に

伏古共同墓地の北側に定められていた。昭和一〇年頃のことであろう。それ以来新墓地を使用していたが、旧墓地は、個人所有地となっていた。この七反の山林地は、住宅地が整備されて行くに従って、個人から個人、そして土地会社にと転売されていった。地価もだんだんとせり上っていたのである。土地会社の要求もあり、これを整地墓地移転することになった。昭和三八年一〇月にこの旧墓地整地に、北大児玉名誉教授が立会い研究資料として参加されていた。

日新会の手により仕事は進められ、日新会員は先祖のこととて協力したが、数多くの遺骨収集には日数もかかっていたようである。

まずブルドーザーの入るまでの準備ブルドーザーがはいっても埋没している所もあれば凸出した所もあり、一応上層部をならすだけでも数日はかかった。少しずつ掘り出しては遺骨を収集し、日数をかけて発掘した。埋葬は肩位迄の深さになっており、完全にきれいな遺骨、頭蓋骨もあった。これらは先生方が持参された。又遺品も発掘された。又風化されて原形をとどめない遺骨もあった。これらの遺骨は、三浦才太郎夫妻伏根ヤヨ氏らの懇ろなカムイノミの後、一二号の共同墓地に叺・袋等につめられ埋葬された。カムイノミの意味は、ジイサンバアサンノトコロニオカエリナサイ、との詞である。〔埋葬骨は〕明治一六年以降のものであろうが調査の報告はわからないが、再び共同墓地に埋葬された。

共同墓地には旭明社に依頼し「蝦夷民族累代之墓」と刻んだ墓石が建立された。

これらの遺骨は北大構内の博物館に保管、展示されている[150)]

なお、『西帯広郷土史』は、「遺骨収集　北大の児玉教授の指導のもとに」(611頁)、「遺骨収集前に児玉教授と」(同) とキャプションを付した児玉作左衛門が写っている写真を載せている。

帯広市伏古共同墓地発掘アイヌ人骨を資料とした研究論文は見当たらない。

⑦千歳市発掘（1965年）

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」59頁には、「千歳」として、「千歳６／成年／男」、「千歳７／老年／男」の２体の記載がある。備考欄には、いずれも「昭和40年７月大場発掘／警察処理同年８月到着」と記載があり、大場利夫の発掘である。発掘経緯の記載はなく、発掘場所も不詳である。

アイヌ納骨堂には、「千歳６」・「千歳７」の頭蓋骨がおさめられている。頭蓋骨箱内の紙片には、「昭和四十年八月」と記載がある。

大場利夫は、1965年７月28日～７月29日、千歳市教育委員会が実施した道路拡張に伴う、キウス遺跡（千歳市中央旭、縄文時代遺跡）の発掘調査に、調査担当者として携わっていた。「千歳６」・「千歳７」は、前述の岩内遺跡（東山区）発掘の時と同様に、縄文時代遺跡に属さない人骨として、発掘されたものと推測される[151)]。

千歳市発掘のアイヌ人骨を資料とした研究発表は見当たらない。

⑧江別市対雁共同墓地発掘（1965年）

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」100頁に、「樺太」として、「樺太（江別）１」～「樺太（江別）20」の記載がある。年代・性別・発掘状態欄の記載もあり、備考欄には「江別市より出土（寺の敷地より）／昭和40年８月発掘／児玉名誉教授、伊藤昌一教授／大場講師、児玉助手参加」と記載がある。

アイヌ納骨堂には、「樺太（江別）１」～「樺太（江別）20」の頭蓋骨20体と四肢骨がおさめられている。四肢骨箱内には、「40.８.22」、「40.８.23」と発掘日付が記載された紙片（札、包み紙）もある。

北海道大学医学部解剖学第二講座編『江別市対雁樺太アイヌ共同墓地調査概要　昭和40年９月18

日』によれば、「旧樺太土人共同墓地の改葬が行われることになつたので、この際学術調査の目的によつて、その一部が発掘された」というのが、医学部が発掘にかかわった経緯である。

発掘時は1965年８月21～24日、発掘調査者は、北海道教育委員会・江別市教育委員会・北海道大学解剖学第二講座、調査担当者は、児玉作左衛門（北海道大学名誉教授）・伊藤昌一（北海道大学医学部教授）であった[152]。

『対雁の碑』では、1964年８月の大雨で江別市対雁共同墓地「樺太移住旧土人先祖之墓」付近の表土がはげて大量の人骨が表出し、江別市が改葬することにしたところ、「これを知った北海道大学医学部が現地に入り、……北海道教育委員会を通し、学術調査を開始することになった」と述べている。墓碑建立者の遺族と道教委との間で発掘同意書を交わして調査を開始したともある[153]。

1965年８月13日付『北海タイムス』（朝刊）は、「二十一日から発掘／“樺太アイヌ”と断定／江別対雁墓苑」と題して、下記のように、北海道教育委員会の委託で北海道大学医学部が発掘を行ったことを報じた。同記事には、樺太アイヌ遺族の了解を得たこと、「樺太アイヌ人骨の発掘を前に霊をなぐさめる児玉北大教授ら関係者」とキャプションを付した慰霊祭の写真も載っている。

> 江別市対雁の市営対雁墓苑で、昨年発見された人骨が、……樺太アイヌの人骨であることが、北大名誉教授児玉作左衛門氏らの鑑定で明らかになり、二十一日から四日間の日程で、道教委、江別市の委託を受け北大医学部人類学教室[154]が発掘調査を行なうことになった。この人骨は、昨年八月、江別市営対雁墓苑の管理人……が、墓苑清掃中に見つけ、同所にあった旧樺太土人墓碑から、樺太アイヌの遺骨と推測されたもの。……対雁墓苑の遺骨は本邦唯一のものと断定、児玉博士の報告で、三十八年から六カ年計画でアイヌ人の資料を収集している道教委が、正式に発掘を行ない、人類学研究の資料として残すことにした。……

『北海タイムス』は、８月22日付朝刊・８月23日付夕刊でも、江別市対雁共同墓地発掘の進捗を大々的に報じた。

『江別市対雁樺太アイヌ共同墓地調査概要　昭和40年９月18日』では、「共同墓地内の「旧土人先祖の墓」〔「樺太移住旧土人先祖之墓」〕と記された墓碑の裏側（西側）を５米×５米の面積を設定して発掘を開始し、人骨の出土状況によつて漸次発掘区域を拡大して調査」し、発掘人骨数は土葬６体、火葬合葬数は100体余（年齢を判別できる頭骨片は20体）と述べている。銛先・鐔・古銭・キセル・装身具などの副葬品も発掘した。

「人骨の人類学的研究の詳細については、後日発表する」と述べてもおり、発掘人骨収蔵目的は「人骨の人類学的研究」にあった。しかしながら、対雁発掘アイヌ人骨を資料とした研究発表は見当たらない。

図33　発掘場所（1965年８月）

図34　発掘作業（1965年８月）

発掘時に撮影した写真は、『江別市対雁樺太アイヌ共同墓地調査概要　昭和40年９月18日』に掲載があり、「北方文化研究施設旧蔵アルバム」にも貼付されている（図33、図34）。

なお、1983年９月５日、川村三郎（南サハリン地区遺骨収集協議会会長）が来学し、北大収蔵樺太アイヌ人骨91体（内20体は対雁発掘分）の返還を求めた。国・北海道の助成を得て江別市に建立予定の慰霊碑において供養したいという趣旨である。その後、医学部はウタリ協会江別支部への返還を決めたが、慰霊施設設置は実現しなかった。ウタリ協会江別支部は、1984年３月１日に「納骨堂を建てることを条件で現地で引き受ける」との意向を表明したが[155]、北海道大学が江別市に納骨堂を建設することはもとよりかなわず、結局樺太アイヌ人骨を返還するにはいたらなかった。

（３）　その他

医学部収蔵アイヌ人骨の照合調査（2010～2012年度）の際に、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には記載がなく、従来収蔵が確認されていなかった様似海岸発掘の４体がアイヌ納骨堂内の四肢骨箱に、平取町二風谷発掘の１体が古人骨中に混在していることが判明した。解剖学第一講座・解剖学第二講座のいずれが発掘したのかは不詳であり、「その他」として述べておくこととする。

①様似町様似海岸発掘（1959年）

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には様似に関する記載はないが、医学部収蔵アイヌ人骨の照合調査により、アイヌ納骨堂内の四肢骨箱２箱に、様似発掘のアイヌ人骨４体が存在することが判明した。四肢骨箱２箱には、「様似海岸34年７月」と表記されていた。発掘経緯の記載はなく、発掘地は「様似海岸」とある以外は不詳である。

様似海岸発掘のアイヌ人骨４体は、前述の静内町豊畑発掘の人骨と同様に、1984年アイヌ納骨堂におさめたアイヌ人骨数1,004体には数えられていない。

教室日誌である「解剖学第一講座（記録）」には、1959年「７月15～７月19日　日高にてアイヌ墓地発掘。松野助教授、鈴木〔健弘〕助手」との記載があり、解剖学第二講座助教授の松野正彦が日高において発掘にかかわったことを示している。この日高における発掘が、四肢骨箱に表記されている「様似海岸34年７月」の日付と符合している。

様似海岸発掘アイヌ人骨を資料とした研究発表は見当たらない。

②平取町二風谷発掘（1959年）

「アイヌ民族人体骨発掘台帳」には平取町二風谷に関する記載はないが、古人骨中に二風谷発掘の頭蓋骨１体が混在していた。この頭蓋骨には「二風谷／昭和34年」、「Schmelztropfen／左⑧　右⑦」と記載された紙片と副葬品（キセル吸口、マレク鈎）が付随していた。「Schmelztropfen」は「琺瑯真珠」を意味する。発掘経緯の記載はなく、発掘地は「二風谷」とある以外は不詳である。

二風谷発掘アイヌ人骨を資料とした研究発表は見当たらない。

なお、渡辺茂・河野本道編『平取町史』（平取町、1974年）には、「二風谷アイヌ墓地（遺跡番号27）」として、以下のような記述がある。

> 二風谷小学校横に位置する。第二次世界大戦敗戦数年後、故北海道大学医学部教授児玉作左衛門博士が、ここよりアイヌ人骨を掘り出して持ち去った。なお、その発掘の労が、この附近の人々に求められ、祖先の墓を掘ることになった人々は、割り切れぬ気持で作業に当たったという[156]。

一方、「アイヌ民族人体骨発掘台帳」、発掘人骨台帳の単頁複写物、電子ファイルホルダー「発掘人骨台帳（抜粋）」には、二風谷における「第二次世界大戦敗戦数年後」の発掘に相当する事実につい

ては記載がない。

４－２．戦後の児玉作左衛門のアイヌ研究

児玉作左衛門は、「アイヌ綜合研究」終了後は古人骨の発掘調査研究、アイヌの髪型・文身へと対象を広げた。戦後は、解剖学者として講座を担った教授就任当初に回帰したような「人脳の形態学」に関する研究を行ないながら、アイヌの衣服・文様・装飾品の論文を発表し、アイヌ人骨を研究資料とした学位論文を指導した[157]。

そして、在職中さらには1959年３月に退官した後も、アイヌの「人種的帰属」と頭蓋大後頭孔損傷に関する論文を、医学部収蔵アイヌ人骨を研究資料として、発表した。関係する児玉作左衛門の論文は、表18のとおりである。表18の№６（単行本）は児玉作左衛門のアイヌ研究の集大成である。№８は№３の、№９は№７の再掲である。

表18　アイヌの「人種的帰属」と頭蓋大後頭孔損傷に関する論文一覧

№	発表名等
1	児玉作左衛門「アイヌの体質」、『日本文化財』第15号、1956年７月
2	Sakuzaemon KODAMA and George KODAMA, “Studies on Artificial Injyuries in Shizunai Ainu Skulls”,『北方文化研究』第２号、1967年３月
3	児玉作左衛門「緊急を要したアイヌ研究――私のあゆんだ道」、『からだの科学』第26号、1969年３月
4	児玉作左衛門「アイヌの頭蓋における人為的損傷」、『アイヌ民族誌』上、第一法規出版、1969年
5	児玉作左衛門「アイヌの人種所属に関する諸説」、『アイヌ民族誌』上、第一法規出版、1969年
6	Sakuzaemon KODAMA, *AINU Historical and Anthropological Studies*, 北海道大学医学部、1970年
7	児玉作左衛門「アイヌ頭蓋に見られる損傷問題」、『北海道医学雑誌』第45巻第２号、1970年４月
8	児玉作左衛門「緊急を要したアイヌ研究――私のあゆんだ道」、『北海道の文化』第21号、1971年３月
9	児玉作左衛門「アイヌ頭蓋に見られる損傷問題」、『北海道の文化』第22号、1971年９月

（1）　アイヌの「人種的帰属」に関する研究

アイヌの「人種的帰属」は、日本学術振興会学術部第八常置委員会第８小（アイヌ）委員会「アイヌ綜合研究」の調査研究分野「解剖学部」に課せられた中心テーマであった。「土人骨格ノ蒐集ト計測、其ノ他一般解剖学的調査」の意義を、児玉作左衛門は、次のように説明していた。

> アイヌはその原始的な生活と特異な体質とによつて、その周囲に住む現代人とは著しく異れる特殊の古代民族であつて、いづれの人種に属するものであるか、今尚ほ未解決の侭にあつて、学者の注目の的になつてゐる……吾々の携はつている体質人類学的方面に於ける目下の急務は、出来る丈広く純粋なアイヌに就て計測記載して置く事であるが、之と共に過去に於ける彼等の体質との比較のために、その骨格の蒐集に努力せねばならぬ事であると思ふものである。
>
> 此の骨格は過去に於て、より純粋であつた彼等の体質を示す唯一の資料であつて、殊に遠い往昔の石〔器〕時代のものから近代に至る迄の多数の骨格を蒐集して比較研究し得れば、実にアイヌ研究のみならず、わが日本民族の体質研究に非常に大なる貢献となるものである[158]

「アイヌの体質」（表18の論文№１）では、以下のような「アイヌの体質」の特徴を揚げて、「古代の白色人種であるということは殆んど決定的のことになっている」[159]と述べている。

〔1〕皮膚の色は褐色で赤味の度合いが多く、日本人より黄色味が少ない。乳幼児のモーコ斑出現率は日本人では96～99％であるが、純粋アイヌでは1.05％、混血で約45％位ではるかに少ない。

〔2〕頭髪は黒く波状毛であり、体毛は非常に濃く身体中毛で覆われている。

〔3〕頭蓋（日高アイヌ）の地平周は平均542㎜で、日本人（畿内男性）より30㎜も大きく、世界で最大である。頭蓋の前後径は非常に長く平均190㎜で、長頭型またはそれに近い中頭型である。日本人は短頭型に傾いており、アイヌを取り巻く東アジア諸人類は短頭型である。

〔4〕顔は顴骨弓間の幅が非常に広く、顔の高さが低く、低頭型である。鼻根部の急激な陥凹は南方民族である証拠の一つであるが、日本人は緩やかなカーブでその差異は明確である。

〔5〕眼は深く凹んでおり、眼と眉毛の間は狭く、両眼の距離は日本人よりはるかに接近している。二重瞼は95％（日本人43％）、モーコ襞は非常に少ない。虹彩は褐色でやや明るい。

〔6〕鼻は上下に短く幅が広い。反歯は少なく、歯牙は強靱で齲歯は少ない。

〔7〕上肢は比較的長く、下肢が短い。

〔8〕ベルンスタイン法による血液型、指紋型・掌紋型はヨーロッパ型である[160]。

「アイヌの人種所属に関する諸説」（表18の論文№５）では、「純血アイヌがヨーロッパ人に似た点」に上記諸点をあげ、「骨格の発育度からみれば、アイヌは現代のヨーロッパ人よりはるかに原始的な状態にある」[161]と述べた。アイヌは「現代のヨーロッパ人よりはるかに原始的な状態」にあるとは、「古代の白色人種」と同義である。

ところが、*AINU Historical and Anthropological Studies*（表18の著書№６）では、次のように述べるのである。

> アイヌ人の起源という根本的な問題に関しては、筆者は自身の人類学的研究から、アイヌ人はモンゴロイドよりもヨーロッパ系人種との間により多くの類似点を有しているような気がしていますが、最終的な意見を述べることは差し控えます[162]

児玉作左衛門は、アイヌが白人であることは「殆んど決定的」と1969年までは述べていたにもかかわらず、1970年には「最終的な意見を述べることは差し控えます」と曖昧な表現に変更した。

（2） アイヌ頭蓋大後頭孔損傷の研究

児玉作左衛門は、“Studies on Artificial Injyuries in Shizunai Ainu Skulls”（表18の論文№２）では、静内町において発掘した132体中４体に見出した頭蓋大後頭孔の人為的損傷について、損傷の位置・形状、出現率を客観的に論じた。

「緊急を要したアイヌ研究――私の歩んだ道」（表18の論文№３）では、次のように述べている。

> この問題の調査はアイヌの生活の秘事にふれるものであり、原始民族の間に行なわれた極端な迷信と、医療の根底をなす巫術が要求する秘薬を、屍体から得ようとする行為に関連するものであるから、調査は極めて困難であったが、ついに私はこれをアイヌの行為であると結論するにいたった。当時でも故老たちからこれらのことを聞きだす以外には途がなかったのであるから、今ではこの種の調査は全く不可能なことだとおもう[163]

児玉作左衛門は、「私はこれをアイヌの行為であると結論するにいたった」と述べ、「アイヌの行為である」との証言を、アイヌから得たかの如き言を弄した。

ところが、「アイヌの頭蓋における人為的損傷」（表18の論文№４）では、「四　人為的損傷問題に関連して起こる疑問」の節を設け、「〔人為的損傷の〕目的と施術者の問題についてはまだ結論に達し

ていない」として、自ら以下のような疑問を呈した。

〔1〕アイヌ古老を訪ねて調べたが、頭蓋損傷は和人が行なったとも、アイヌが行なったとも確かめることはできなかった。

〔2〕損傷は石器時代の頭蓋、アイヌ以外の民族の頭蓋にもあり、「従来の説「人為的損傷」」に対して疑いをもつようになった。

〔3〕明らかにねずみなどの齧歯類の歯の條痕が現われているものがあった。アイヌの埋葬は浅いので、小動物の侵入はかなりあったと思う。

〔4〕従来の説はみな想像説であって確証となるものはなかった。

〔5〕物的証拠である頭蓋切除の形式の精査によって、問題の真相は判明するものと信ずる[164]。

大後頭孔切除は、アイヌによるという従来の自説を疑問視し、「ねずみなどの齧歯類の歯の條痕」を記してネズミが囓ったものであることを示唆した。

児玉作左衛門は、発掘アイヌ人骨に関する最初の論文である「八雲遊楽部に於けるアイヌ墳墓遺跡の発掘に就て」において、頭蓋骨における大後頭孔縁部の切除は、「小刀（マキリ又はタシロ）を用ひたものである事は容易に判断出来る」[165]と述べていた。そして、「屍体の埋葬直後に、アイヌによつて行はれたものと思ふのは、最も妥当であると考へる」[166]と述べていた。その際に、アイヌの証言は得られなかったこと、アイヌ墓へのネズミの侵入・営巣、欧州・アジア・大洋州の各地で損傷がある頭蓋骨が見出されていることにも触れていた。換言すれば、1969年に児玉作左衛門があげた「疑問」は、齧歯類の歯の條痕以外は新しい問題ではなかった。かつて児玉作左衛門は「想像説」を主張したのではなく、想像を根拠にアイヌによる損傷だと断定していたのである。

しかも、児玉作左衛門は、1939年に発表した「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」では、大後頭孔を切削した図版を掲げながら、アイヌが使用する小刀を用いて解剖屍体の大後頭孔縁切除実験を行ったところ、「新鮮な骨質は晒曝したものよりは遙かに簡単に行はれた」と述べていた[167]。

AINU Historical and Anthropological Studies（表18の№6）では、嗣子である医学部講師児玉譲次の協力を得て、1965年から損傷問題について再検討を行い、アイヌの小刀を用いて行ったという頭蓋大後頭孔縁切除実験を踏まえて、次のように従来の説明を変更した。

〔1〕小刀でつけた損傷の切除面と、発掘したアイヌ頭蓋の切除面との間には著しい相違がある。前者は様々な間隔で不規則に並んだ切除條痕が現れた。一方、後者は、ネズミ等の齧歯類が咬んだ切除に極めて類似しており、密集して並んだ細い切除條痕を示していた。小刀や鋸によって、大後頭孔縁を咬んだような形態を複製するのはほとんど不可能であることを確証した。齧歯類が咬んだ場合、切口は骨の縁に矩形につけられたが、小刀で削り取った場合、切口は骨の縁へ斜めについた[168]。

〔2〕1968年に医学部校舎の移転に備えて解剖学自習室南側の骨晒場の整理を行った際に、大後頭孔にネズミが囓った痕跡があり、脳腔にネズミの巣がある和人の頭蓋を見出した[169]。Fig. 124にその写真を載せている[170]。

〔3〕頭蓋損傷部分の切り口表面を正確に調べて、ネズミのような齧歯類が囓ったことが損傷の起因だと確認した。ナイフあるいはノコギリによって、齧歯類によって作られた切り口表面と同じように人為的に切り口表面を作ることはほとんど不可能であった[171]。

〔4〕呪術という迷信によって、人間の骨、筋肉あるいは脳を秘薬として使う風習があったアイヌが施術を行ったにちがいないという、従来の推測的結論を変更し、損傷はネズミのような齧歯類が囓ったことに起因するという結論に達した[172]。

先述したように1939年には、小刀で大後頭孔切除実験を行い、発掘アイヌ頭蓋と同じ切除をなし得

たと述べていたのに、ここにいたって「人為的に切り口表面を作ることはほとんど不可能」で、北海道大学医学部の骨晒場で見出したネズミが営巣していた頭蓋骨の切除を根拠に、「ネズミのような齧歯類が囓ったことに起因するという結論」を導き出したのである。

「アイヌ頭蓋に見られる損傷問題」（表18の論文№７）では、児玉作左衛門は「研究結果」を次のように述べている。

> ……私の最近の研究では、この〔頭蓋骨の〕損傷は鼠が咬（か）じったものと判明した。従来小刀の痕と見られたのは明らかに鼠の歯によるものであった。家鼠による実験的の咬痕もこれに一致した。この動物は頭蓋のほとんど一定した部分を咬じるし、この習性は石器時代から今日まで、また世界中どこでも変わらないらしい。１昨年〔1968年〕医学部移転のさいに解剖の旧校舎の晒し場で、ある和人の頭蓋の大後頭孔後縁が削り取られ、頭蓋腔の中に鼠の巣が発見されたが興味ある例だと思う。ただ私は長い間アイヌを疑っていたことを深く恥じている[173]。

「なんとか事実を引きだそうと努力した……私は何とかしてアイヌからこのことを聞きだしたいと思って、部落の古老たちについて調べてみたが、どうしてもこれをつきとめることはできなかった」[174]とも記している。しかし、アイヌから期待する答えを引き出せなかったのは、1970年にいたって遭遇した問題ではなかった。児玉作左衛門は、1936年に「北海道中のどこの部落へ行つても、又どのアイヌに聞いても、斯う云ふこと〔頭蓋骨の損傷〕はアイヌがやつたのではないと答へるのが常」であったと記している[175]。八雲町遊楽部において発掘した頭蓋大後頭孔に初めて損傷を見出した1934年から、その事実を公刊する1936年までの間、児玉作左衛門はアイヌに疑問を呈し、その都度否定されていた。その後も同様の事態は繰り返された。その際に、アイヌが児玉作左衛門の問いを否定するだけでなく、逆に疑問を呈し、批判したことがあったと考えても不自然ではない。

児玉作左衛門が「ただ私は長い間アイヌを疑っていたことを深く恥じている」と記したのを、説明不足と指摘することは容易だが、今はそのままに受け止める他はない。

児玉作左衛門は1970年12月26日に死去した。『北海道の文化』第21号（1971年３月）は、児玉作左衛門の「緊急を要したアイヌ研究――私の歩んだ道」（『からだの科学』第26号、1969年３月）を転載した。児玉作左衛門死去直後に、頭蓋大後頭孔損傷は「アイヌの行為であると結論するにいたった」と述べた論文を載せた『北海道の文化』は、次号の第22号（1971年９月）では、児玉譲次「『アイヌ頭蓋にある切除痕の問題』に関する訂正」を添えて、児玉作左衛門「アイヌ頭蓋に見られる損傷問題」（『北海道医学雑誌』第45巻第２号、1970年４月）を転載した。児玉譲次は「アイヌ頭蓋に見られる損傷問題」は「訂正文ともいうべき結論」だと述べている[176]。

児玉作左衛門は、アイヌが頭蓋損傷施術者との主張を、1970年にはネズミの咬痕と修正した。以下にその間の経緯をまとめる。

〔１〕1939年に、アイヌが施術者であることを証明するために、解剖屍体の大後頭孔をアイヌが使用する小刀で切除して、発掘アイヌ人骨にある損傷と同じものを得た。（「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」1939年）

〔２〕1965年以降、頭蓋大後頭孔を小刀で切除する実験を行った結果、齧歯類の咬痕の切口表面と同じように、人為的に切り口表面を作ることはほとんど不可能であった。（*AINU Historical and Anthropological Studies*，1970年）

〔３〕1968年に、医学部骨晒場において大後頭孔にネズミの咬痕のある頭蓋骨を見出した。（*AINU Historical and Anthropological Studies*，1970年）

〔４〕家鼠による実験的の咬痕も発掘アイヌ人骨の損傷と一致した。（*AINU Historical and*

Anthropological Studies, 1970年）

一瞥して明らかに問題がある。

一つは、資料（図版・写真、頭蓋骨の出所）の提示である。

〔１〕（1939年）については解剖屍体の大後頭孔を小刀で切除した図版（手書き）（「アイヌの頭蓋骨に於ける人為的損傷の研究」78頁）、〔３〕（1968年）については大後頭孔にネズミが営巣していた、しかもネズミの咬痕のある頭蓋骨（写真）を掲げている（*AINU Historical and Anthropological Studies*, p.257）。ところが、〔２〕（1965年以降）については、行ったという頭蓋大後頭孔を「小刀で切除する実験」の結果を示す図版・写真を掲げていないし、対象とした頭蓋骨の出所も記載がない。〔４〕（年代不詳）についても実験して得たという家鼠の咬痕を示す頭蓋骨の図版・写真を掲げておらず、実験に用いた頭蓋骨の出所も記載がない。

さらに一つは、〔１〕（1939年）と〔２〕（1965年以降）の間の矛盾である。

いずれもわざわざアイヌの小刀で削った頭蓋骨で、〔１〕では発掘アイヌ頭蓋骨の損傷と同じ切削を見ることができ、〔２〕では発掘アイヌ頭蓋骨の損傷と同様の切除はまったく不可能であったという説明の間に、整合性がないことは歴然としている。頭蓋損傷はアイヌが行ったという説明から、鼠の咬痕だとの訂正は、ここにいたってどちらの説明も学術的な確かさを保持していないことを、図らずも露呈してしまった。

Ⅲ－２．アイヌ納骨堂建設以前のアイヌ人骨の保管と「天覧」

１．発掘・収蔵アイヌ人骨の保管

１－１．北海道帝国大学医学部解剖学法医学講堂におけるアイヌ人骨の保管（1920～1938年）

1919年２月６日に開学した北海道帝国大学医学部では、当初、「解剖学法医学講堂」（通称：南校舎、木造２階建て、北12条西６丁目、現在の薬学部南側、1920年６月28日に竣工）[177]の中央階段をはさんで、西側１・２階を解剖学第一講座・解剖学第二講座が使用した。１階西側には小使室、顕微鏡室写真室、第１～第３研究室が並び、２階西側には２助教授室、１研究室、２教授室が並んでいた（図35、図36）。東側１・２階は、法医学講座が使用していた。

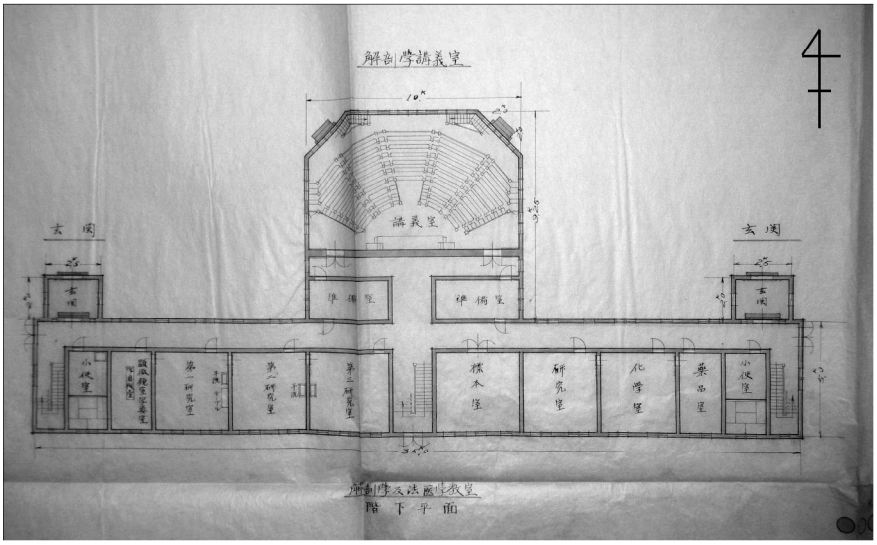

図35　「解剖学及法医学教室　階下平面」

（「北海道帝国大学医学部創立費新営費工事落成調書附図」所収、事務局所蔵）

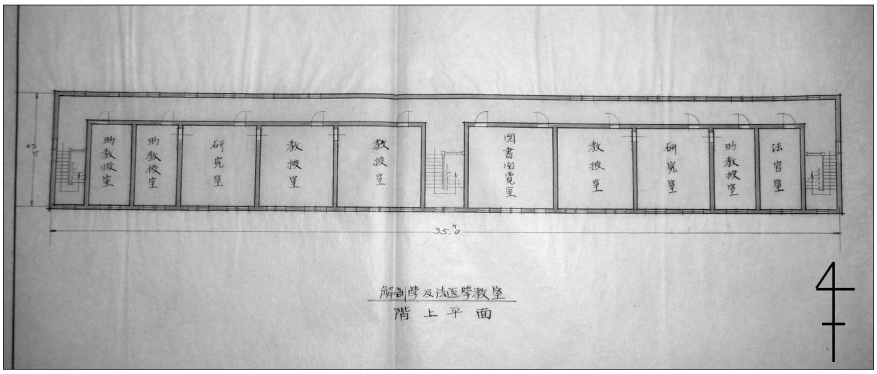

図36 「解剖学及法医学教室　階上平面」
（「北海道帝国大学医学部創立費新営費工事落成調書附図」所収、事務局所蔵）

1929年５月、解剖学第二講座教授に児玉作左衛門が赴任し、定年退官する1959年３月までは、解剖学法医学講堂の西側１階を解剖学第一講座が、西側２階を解剖学第二講座が使用した[178]。２階中央階段寄りの部屋が児玉作左衛門の教授室である。

解剖学第一講座が発掘・収蔵したアイヌ人骨の保管場所は、解剖学法医学講堂１階西側のいずれかの部屋と考えられるが、保管状況に関する記録は見当たらない。

解剖学第二講座が発掘・収蔵したアイヌ人骨の保管場所は、後述する「医学部標本庫」が1938年10月21日に竣工するまで、解剖学法医学講堂２階西側の教授室・研究室であった。教授室・研究室では、机上と壁面に設置した木製棚に配置して保管した。

机上と壁面木製棚における頭蓋骨の保管状況は、1934年９月には図37のようであった。同じ部屋で1934年10月に撮影された写真は、図38の新聞切抜帳（1934年10月28日付『東京朝日新聞』記事貼付）にもあり、写っているのは八雲町遊楽部旧アイヌ墓地発掘の頭蓋骨である。部屋は解剖学法医学講堂２階西側の研究室と考えられる。図39の新聞切抜帳（1938年５月７日付『北海タイムス』記事貼付）中の写真は、1938年５月解剖学法医学講堂２階西側の教授室での撮影と考えられる。いずれも、頭蓋骨を一体ずつおさめた木箱（木製トレー）を、机上および壁面木製棚に並べてあることが確認できる。木箱（木製トレー）には、前面中央にラベルが付されている。これが「アイヌ綜合研究」に参画した児玉作左衛門が、1934～1938年に旧アイヌ墓地で発掘したアイヌ人骨就中頭蓋骨の保管状況であった。

なお、四肢骨・副葬品等の保管状況を示す資料は見出せない。

ところで、歌人川田順（1882～1966年）は、解剖学法医学講堂におけるアイヌ頭蓋骨の保管状況を記述していた。川田順は、1937年６月、工学部教授池田芳郎から「アイヌの髑髏を鑑賞しませんか。歌になりますよ」と勧められて来学した[179]。川田順は、池田芳郎の「Ｋ君のアイヌ髑髏蒐集は、既に世界一で、四百余個もあります。それが研究室の棚にずらりと並んだ光景は、むしろ悲壮ですよ」[180]との説明を聞きながら、「Ｋ博士」を訪問した折の模様を紀行文「アイヌの髑髏」に書き残した。

「Ｋ博士」は、池田芳郎と旧制函館中学校の同級生であった児玉作左衛門に他ならない。

川田順は、「僕は先づ、室中央の卓上に置かれた十数個の髑髏〔落部村で英国箱館領事館員が盗掘した13体のアイヌ頭蓋骨〕に眼を遣つた。それから、四壁の棚に、無数に乍併行儀よく並べられた髑髏群に、漸次眼を注いで行つた。思つたほど気味悪くはない」と記している。川田順が頭蓋骨を見た部屋は教授室であろう。川田順は「〔落部村発掘の13体の頭蓋骨は〕Ｋ博士等の尽力によつて北大の研究室に納まることになつた」との児玉作左衛門の説明を記し、池田芳郎の「あの十三個がＫ君の自慢なんですよ。校宝でもあり、国宝であるさうです」との言も書き記した[181]。

図37　解剖学法医学講堂２階の研究室での保管状況（1934年９月）
（『児玉作左衛門先生生誕百年記念誌』54頁左下掲載写真を加工）

図38　新聞切抜帳（1934年10月）
（大学文書館所蔵）

図39　新聞切抜帳（1938年５月）
（大学文書館所蔵）

１－２．北海道帝国大学医学部標本庫の設置（1938年）

解剖学第一講座・解剖学第二講座は、解剖学法医学講堂の建物以外に、「標本室」（鉄筋コンクリート造３階建て、北12条西６丁目、現在の薬学部南西側、1923年９月20日に竣工）の３階を「解剖標本室」として「アイヌ綜合研究」参画以前から使用していた。解剖標本室には、各自講座が保管していた標本資料類を展示していた。伊藤昌一は、その模様を次のように述べている。

……学会〔第40回日本解剖学会集会：1932年７月26～28日〕を開催するに当って解剖標本室が整備された。かねて各種内臓・体肢の筋および関節・人体凍結横断標本・骨標本そのほか多くの標本が作製されており、……平光教授の研究対象となったアイヌ屍体のデスマスクもあるので、これらを整備して学生の見学に供しようという計画が出され、その標本室として、南校舎から西校舎に続く廊下に接する鉄筋コンクリート三階建の書庫の三階が当てられた。ここに鉄枠のガラス陳列棚八台をならべ、その中に各系統ごとに各標本が配列された。この標本室は学会の参加者にも紹介された[182]。

その後、「アイヌ綜合研究」に参画した児玉作左衛門は、旧アイヌ墓地の発掘を各地で重ね、収蔵したアイヌ人骨の保管施設を新たに企図した。そのための施設として、「医学部標本庫」が1938年５月28日に着工した[183]。

工事着工直前の1938年５月７日付『北海タイムス』は、「愛奴研究資料／グロな骸骨五百体／北大で保存骨庫新設」と以下のように報じた（図39）。

北大医学部には、その研究上不気味なものが処狭しと並んでゐるが、近くそれに輪をかけた様

にグロテスクな建物―骨庫―が、解剖学教室児玉作左衛門教授の処に近く出来ることになつた。この骨庫は児玉博士が過去十数年に亘つて蒐集した、各地の貴重なアイヌの骨格を安置するものだが、その数は約五百体。今日までに世界各国の学者によつて発掘蒐集されたアイヌの骨格は大体百体と推算されてゐるからその過半数がこの標本庫に納められる……未だに其人種系統が甲論乙駁で全く不明となつてゐる、然も次第に数を減じて行くアイヌ種族なので、その解剖学的研究には骨格の貴重さも愈よ増大して行くといふので、急速にこの不燃質アイヌ骨格標本庫が設けられることになつたものである[184]

以下は同紙が報じた児玉作左衛門の談話である。

この標本庫は、二十坪許りの土地にコンクリート二階建に造るもので、工費六千円といつた小ぢんまりとしたものです。アイヌの人種系統を調べる上に、この骨格は実に尊いものですが、実にかゝるものは粗末に扱へぬものなので、適当な処に蔵つておくことは是非とも必要と思ひ、この度作つて貰ふことになつたのです[185]

児玉作左衛門は、アイヌ人骨就中頭蓋骨を「実に尊いもの」、「粗末に扱へぬもの」と考えていた。これは川田順が記した「校宝」、「国宝」との伝にも通底する。当時においては、形質人類学にとっては、頭蓋骨の計測が最も重要な方法であったからである。

医学部標本庫は、1938年10月21日に竣工した。施設区分は「倉庫建」で、構造は「混凝土造〔コンクリート製〕／平屋建／ギャラリー付」、建坪は18.75坪であった[186]。医学部標本庫は、解剖学法医学講堂の南西角と渡り廊下でつながっていた（図40）。

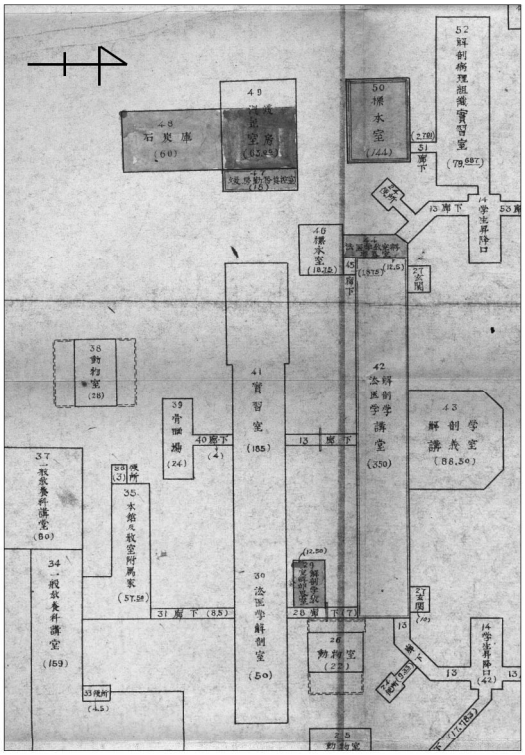

図40　医学部建物工作物配置図（1950年度）
「46　標本室」（医学部標本庫）は「42　解剖学法医学講堂」と、「50　標本室」は「52　解剖病理組織実習室」とそれぞれ渡り廊下でつながっている。
（「北海道大学所属国有財産沿革」十二冊の内其四所収、大学文書館所蔵）

伊藤昌一は、医学部標本庫に関して次のように述べている。

……アイヌ骨格の発掘蒐集に伴って副葬品そのほかの土俗品なども急激に増加してきたので、これらを保管するための資料室の建設が要望されていたが、昭和一〇年頃ようやく南校舎〔医学部解剖学法医学講堂〕の南西角に続けて二階建ての総坪数約三〇坪の建物が建てられた。この建物はいわゆる吹抜け式で、一階の天井の中央部が二階の床に四角形に抜かれた建物で、その出入口は南校舎の階段の踊り場から二階に入るように造られた。この建物の四方の壁は一階も二階も窓

以外はガラス戸棚がとりつけられ、ここにはつぎつぎと蒐集されたアイヌの頭蓋および後にはモヨロ貝塚人の頭蓋なども整然と地方別に配列された。副葬品なども格納された。一階では床上にガラス棚が二列にならべられ、ここにはアイヌの民族資料例えばヒゲベラ・耳輪・刀剣の鞘・タシロやマキリの鞘・玉類・各種彫刻品・衣類・アイヌの家の模型などが所せまいほど陳列された。二階では床の中央の吹抜けの縁に沿うて棚をならべ、ここにはおもに古い土器・石器・骨角器類、そのほかモヨロ貝塚出土の多くの標品類が配列された。この資料室に陳列されたものはいずれも貴重なもので、内外の専門家のみならず多数の人々が見学に訪れている。これらの民俗品には一部児玉教授個人所有のものも含まれている[187]

「保管するための資料室」と伊藤昌一は記しているが、医学部標本庫は単なる保管施設というよりは、展示施設でもあった。

図41では、医学部標本庫ならびに標本室の建物の位置を俯瞰して確認できる。解剖学法医学講堂は①、医学部標本庫は②、標本室（3階が解剖標本室）は③である。コンクリート製の煙突（図40の「49　暖房汽缶室」）は現存しているので、その南西側の道路から、かつての医学部標本庫、標本室のおおよその位置を知ることができる。図42の平面図では、「解剖学法医学教室」〔解剖学法医学講堂〕西側の南に斜線を施した箇所が、医学部標本庫である。

竣工成った医学部標本庫について、1938年11月4日付『東京日日新聞』朝刊（北海道樺太版）は、「世界に誇る／アイヌの標本室／北大医学部に設置」と見出しを掲げて次のように報じた。

主として児玉医学部教授の蒐集になるアイヌの骨格や、それと丶もに掘り出した宝物がこ丶に入れられるわけだが、児玉教授のアイヌ骨格は約五百にのぼり、東大に百数十、その他世界各国のを集めても三百に足りぬので、この北大標本室はその意味で世界一のものを蔵するわけだ[188]

また、「内部の付帯工事をしてゐるが、本年中には全部この標本室に入ること」、コンクリート製で「防火、防災の北大営繕課自慢」の施設だとも報じた[189]。「内部の付帯工事」は、広い床面積を確保するために、平屋内部を上下に仕切って中央部を吹抜けにし、上段を回廊状とする工事を指していた。

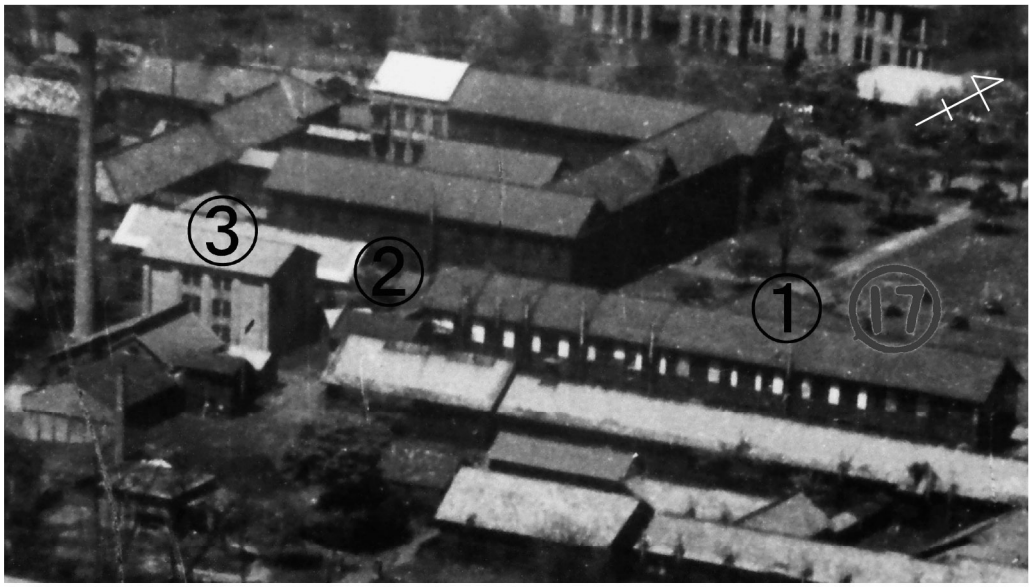

図41　医学部俯瞰（1958年6月撮影）
②の下に医学部標本庫の屋根が見える。
（航空写真パネルを加工、大学文書館所蔵）

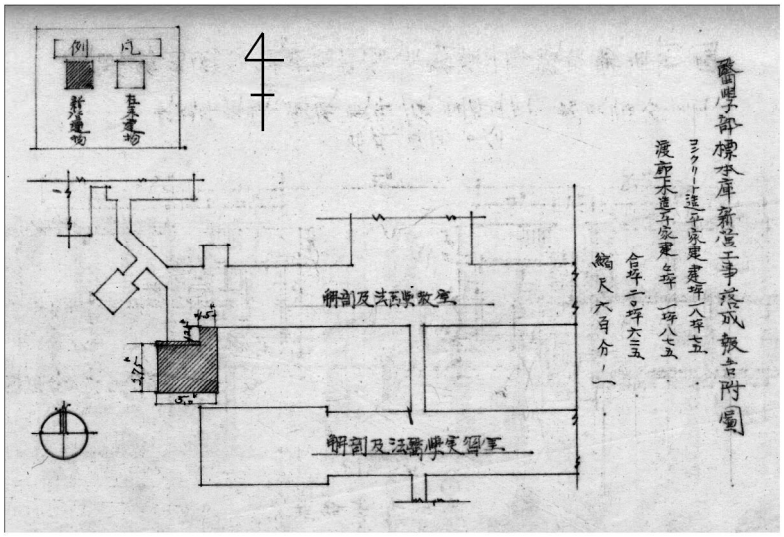

図42 「医学部標本庫新営工事落成報告附図」(1924年頃)
(「北海道帝国大学医学部創立費新営費工事落成調書附図」所収、事務局所蔵)

図43は内部構造を示す平面図である。左側が１階である。この平面図は「吹抜け式で、一階の天井の中央部が二階の床に四角形に抜かれた建物で、その出入口は南校舎の階段の踊り場から二階に入るように造られた。この建物の四方の壁は一階も二階も窓以外はガラス戸棚がとりつけられ」ていたという伊藤昌一の回想とほぼ符合する。「出入口は南校舎の階段の踊り場から二階に入るように造られた」とあるが、１階にも出入口があったことは図42と図43で確認できる。

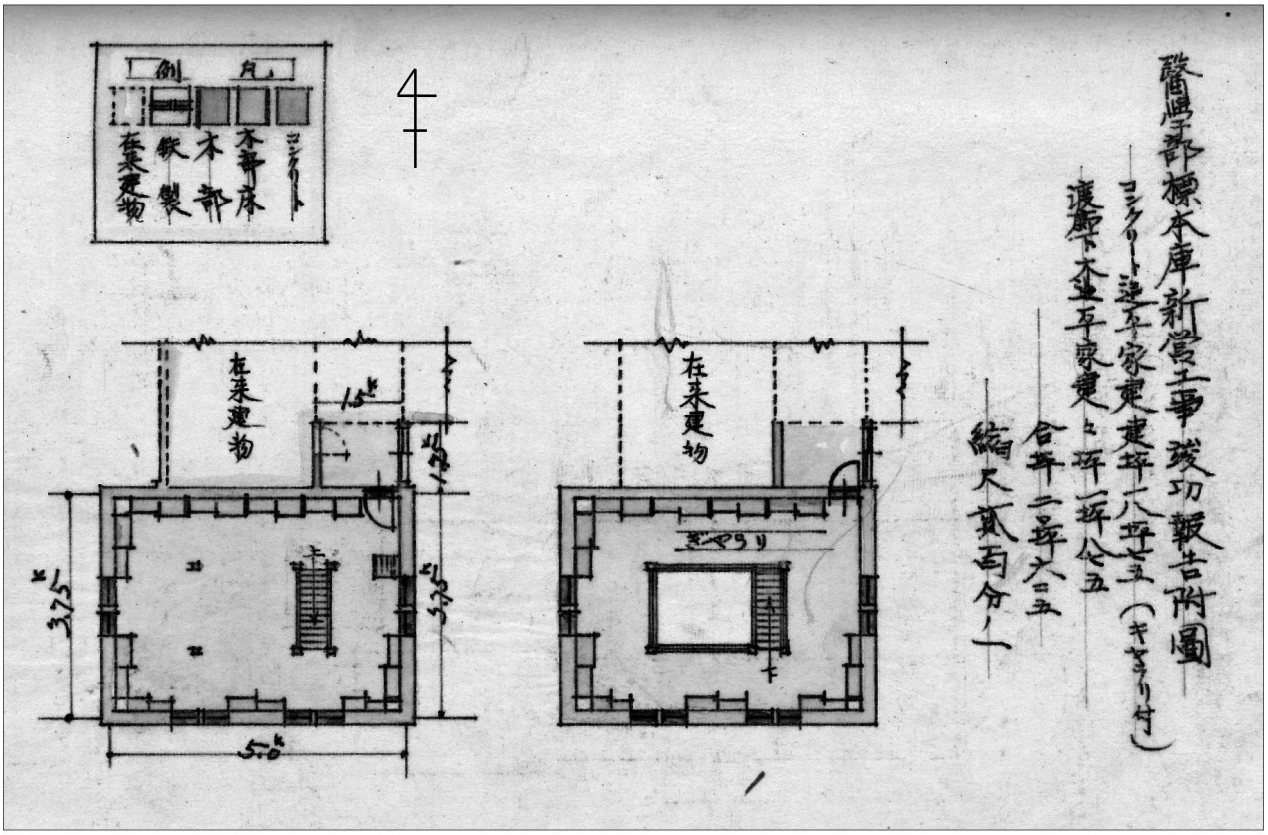

図43 「医学部標本庫新営工事竣功報告附図」(1924年頃)
(「北海道帝国大学医学部創立費新営費工事落成調書附図」所収、事務局所蔵)

医学部標本庫の内部の様子は、図44・図45の新聞切抜帳からうかがうことができる。図44の上段

（1948年12月７日付『北海道新聞』記事貼付）は１階、図44の下段（1948年12月７日付『新北海』記事貼付）は２階、図45（1960年12月18日付『北海道新聞』記事貼付）は１階である。いずれも竣工時から相当時間が経過した戦後に撮影された写真である。モヨロ貝塚発掘資料なども含まれているが、アイヌ頭蓋骨の保管・展示の様子を窺い知ることはできる。

医学部標本庫の収蔵品リストを作成した形跡はない。医学部標本庫の設置後における四肢骨の保管状況を示す資料も見当たらない。

図44　新聞切抜帳（1948年12月）
（大学文書館所蔵）

図45　新聞切抜帳（1960年12月）
（大学文書館所蔵）

１－３．北海道大学医学部の新築移転に伴うアイヌ人骨の保管（1968年）

1968年11月30日、医学部「基礎医学実験研究棟」（通称：北研究棟、北15条西７丁目、現在地）が竣工し[190]、解剖学第一講座・解剖学第二講座は、同年12月５日～18日、新築成った基礎医学実験研究棟３階へ移転した[191]。これにともない、医学部標本庫と解剖学法医学講堂に保管していた解剖学第一講座・解剖学第二講座収蔵アイヌ頭蓋骨等は、基礎医学実験研究棟３階へ移された。基礎医学実験研究棟におさまりきらなかったアイヌ人骨は、1970年11月30日に竣工した「基礎医学研究棟」（通称：東（北）研究棟、北15条西７丁目、現在地）[192]へ移された。

その後、医学部標本庫は1970年２月19日に歯学部へ用途変更され、1971年頃に取り壊された[193]。

移転後に、定年退官あるいは病死にともなう人事異動があった。すなわち、解剖学第一講座では、1977年５月に松野正彦が急死し、1978年11月に井上芳郎が教授に就いた。井上芳郎の研究分野は神経解剖学であり、神経系特にニューロンや伝導路の発生に関してグリア細胞を研究テーマとしていた[194]。解剖学第二講座では、1971年３月に伊藤昌一が定年退官し、助教授であった児玉譲次が1971年９月に教授に就いた。児玉譲次の研究テーマは、「ヒト胎児頭蓋を構成する頭蓋骨および顔面骨の形態発生」であった[195]。いずれも、研究テーマは、「アイヌの形態学・人類学的研究」とはまったく無

縁であった。その後も、アイヌ人骨を研究資料とする研究テーマをもった教官は選任されていない。換言すれば、「アイヌの形態学・人類学的研究」は、解剖学第一講座では1977年まで、解剖学第二講座では1971年まで、研究の主軸であったが、1970年代に研究テーマが転換されたため、アイヌ人骨は、解剖学第一講座・解剖学第二講座において、研究上の必要性がなくなってしまったのである[196]。

1968年12月医学部新築移転直後の保管状況を示す資料は見当たらない。しかし、1984年アイヌ納骨堂建設までは、医学部の教育研究組織に大きな改編はみられないので、1968年12月以降の保管状況は、1981～1984年に医学部が把握した保管状況と同様であったと考えられる。

1983年７月７日現在の、解剖学第一講座・解剖学第二講座収蔵アイヌ頭蓋骨等の保管場所は、以下のようであった。図46～図49は、ほぼ同時期の医学部校舎の平面図（1979年頃）である。

① 解剖学第一講座収蔵アイヌ頭蓋骨181体等は、基礎医学実験研究棟３階の「研究室（中枢神経）」（通称：第一解剖学第５研究室）に保管していた。

② 解剖学第二講座収蔵アイヌ頭蓋骨783体等は、基礎医学実験研究棟３階の「骨格計測室」（通称：第二解剖学第４研究室）に保管していた。

③ 解剖学第一講座・解剖学第二講座収蔵アイヌ四肢骨450箱（木箱）等は、基礎医学研究棟２階の「学生実習室」（201室・202室）に保管していた。

④ 解剖学第二講座収蔵副葬品は、基礎医学実験研究棟２階の「比較解剖研究室」（210室）に保管していた[197]。

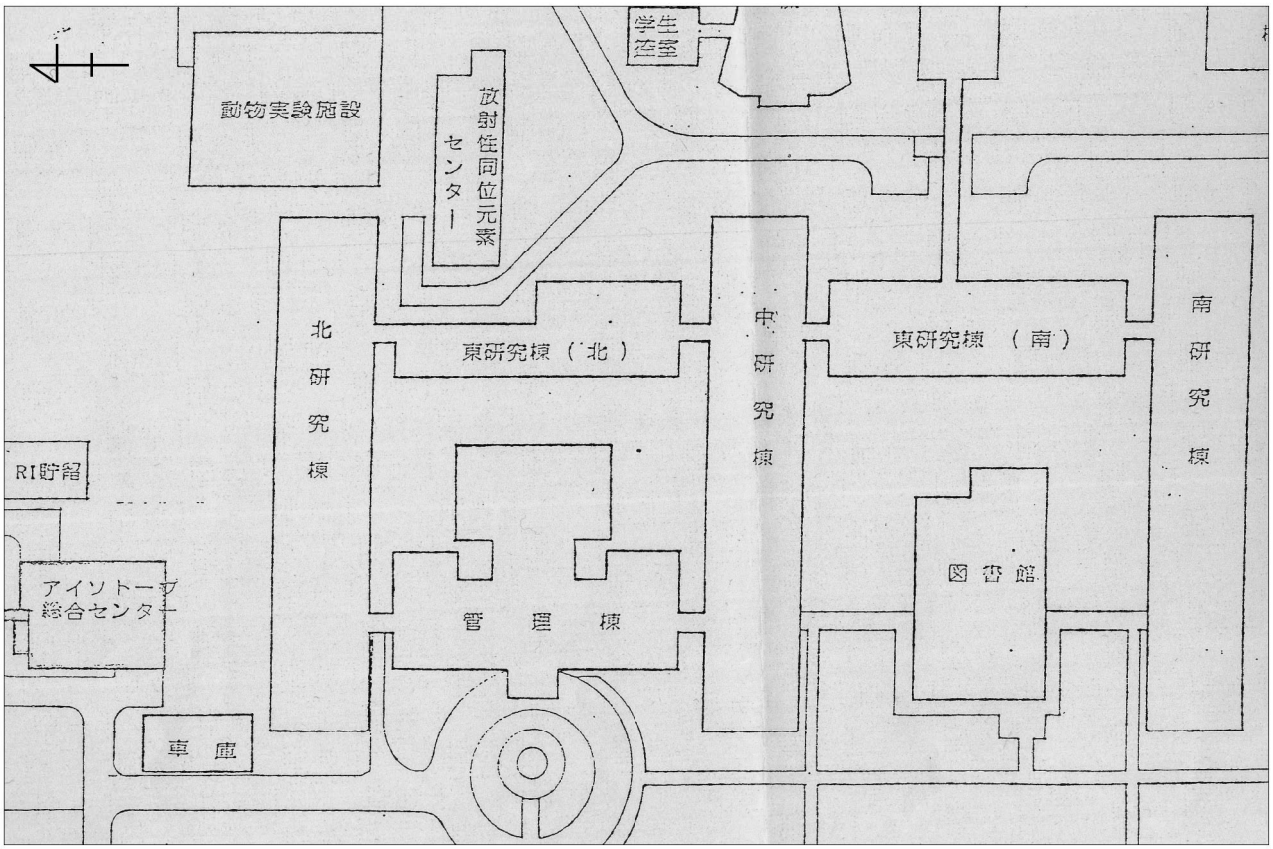

図46　医学部配置図（1979年頃）
（「消防関係設備配置図」所収、医学部所蔵）

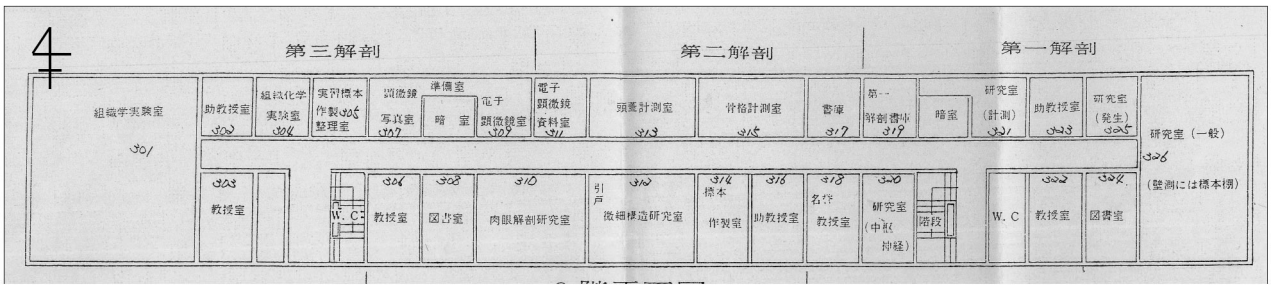

図47　医学部基礎医学実験研究棟（北研究棟）３階の平面図（1979年頃）

（「消防関係設備配置図」所収、医学部所蔵）

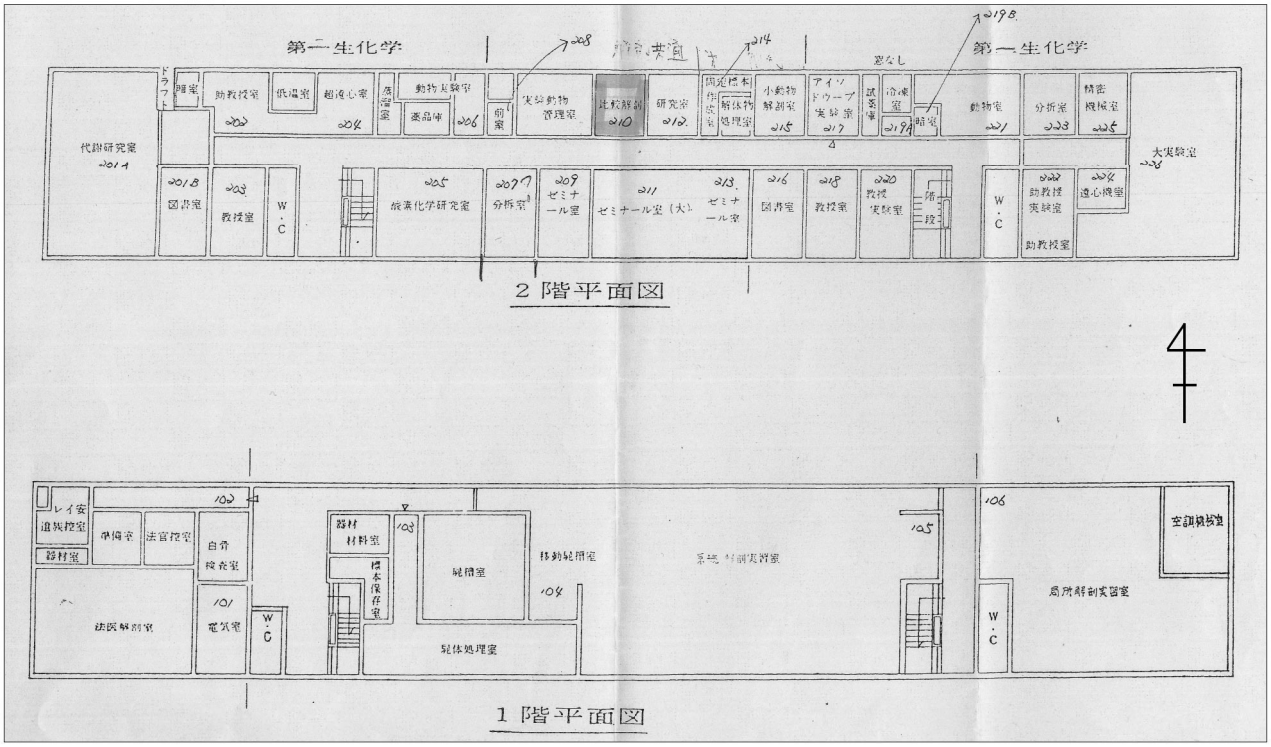

図48　医学部基礎医学実験研究棟（北研究棟）１階・２階の平面図（1979年頃）

（「消防関係設備配置図」所収、医学部所蔵）

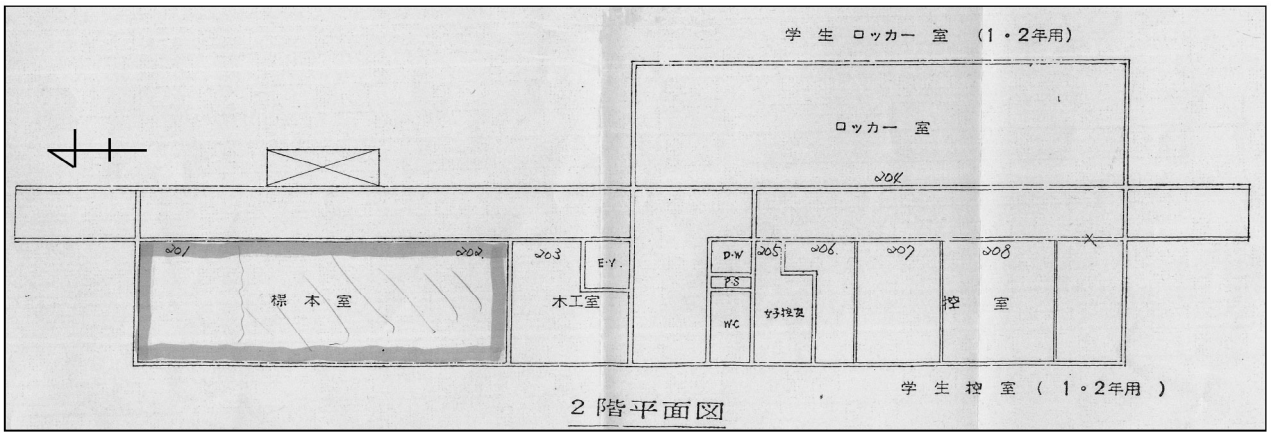

図49　医学部基礎医学研究等（東（北）研究棟）２階の平面図（1979年頃）

（「消防関係設備配置図」所収、医学部所蔵）

1984年３月19日現在、解剖学第一講座「研究室（中枢神経）」（第５研究室）での頭蓋骨の保管状況は図50～図52、解剖学第二講座「骨格計測室」（第４研究室）での頭蓋骨の保管状況は図53～図56、基礎医学研究棟２階の「学生実習室」（201室・202室）での四肢骨等の保管状況は図57～図60のとおりであった[198]。

各保管場所に施錠してあったことはいうまでもない。

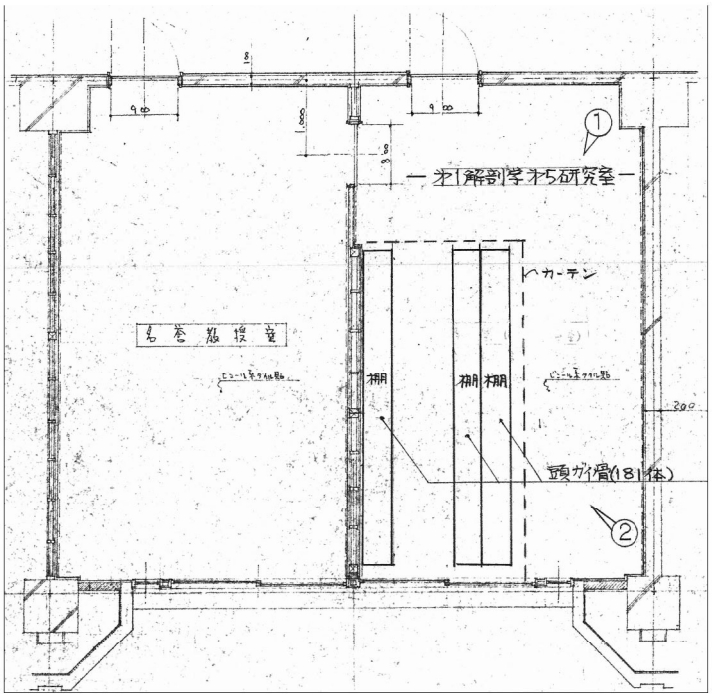

図50　第５研究室の平面図（1984年３月）

図51　第５研究室の室内現況（1984年３月）

図52　第５研究室の室内現況（1984年３月）

図53　第４研究室の室内現況（1984年３月）

図54　第４研究室の室内現況（1984年３月）

図55　第４研究室の室内現況（1984年３月）

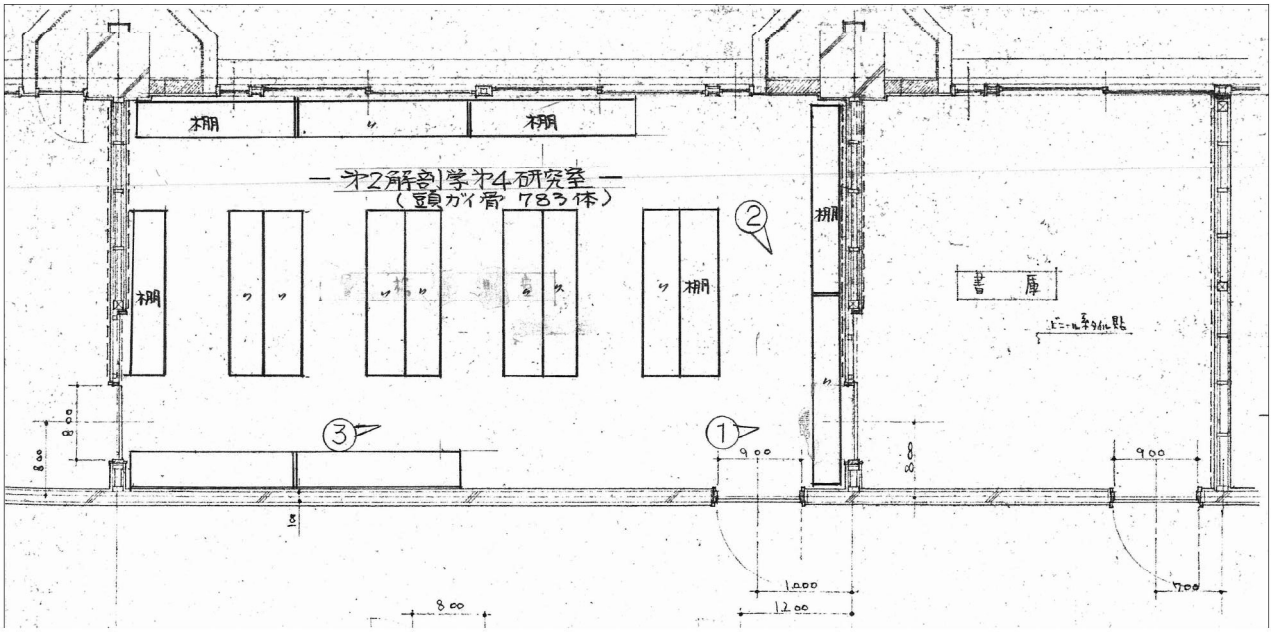

図56　第４研究室の平面図（1984年３月）

図57　学生実習室の室内現況（1984年３月）

図58　学生実習室の室内現況（1984年３月）

図59　学生実習室の室内現況（1984年３月）

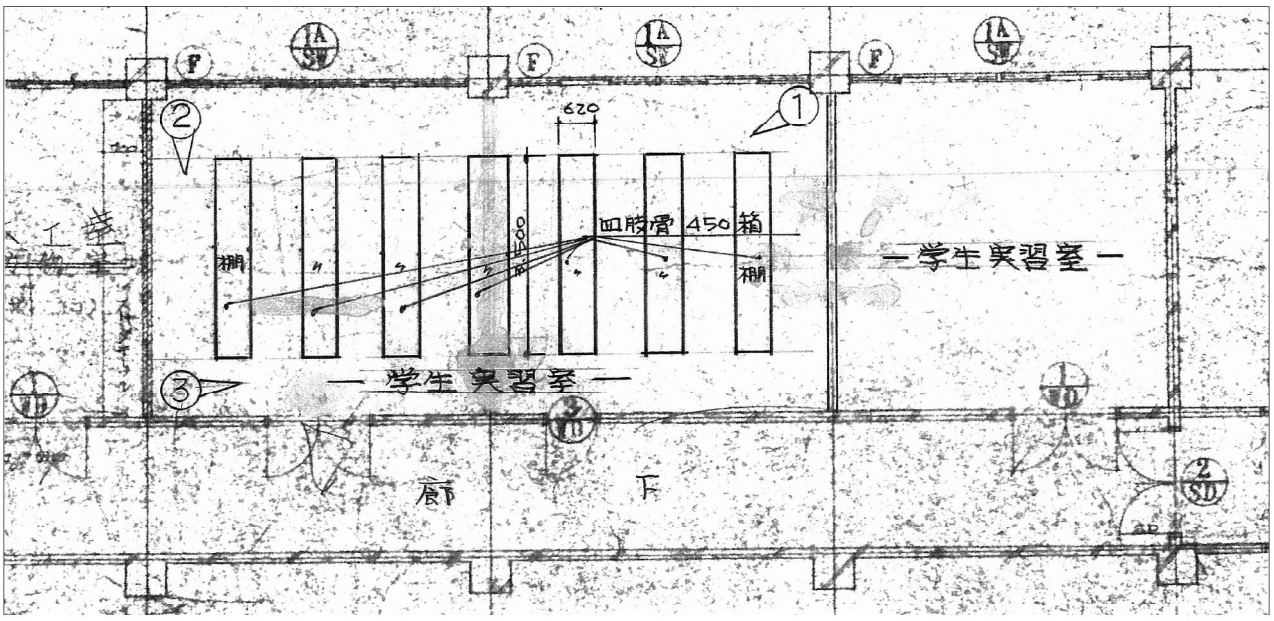

図60　学生実習室の平面図（1984年３月）

２．北海道帝国大学医学部解剖学第一講座・解剖学第二講座収蔵アイヌ人骨の「天覧」

２－１．澄宮の「台覧」（1932年８月14日）

1932年８月14日、北海道帝国大学医学部は、解剖学第一講座収蔵アイヌ頭蓋骨26体を中央講堂に展示して、澄宮崇仁親王（後の三笠宮）の「台覧」に供した[199]。医学部附属医院は、「炭塵、石塵吸入ニ因ル炭肺及石肺（夕張炭礦夫）ノ「レントゲン」写真」（有馬英二）など17点を展示したが[200]、医学部からは頭蓋骨が唯一の出展であった。展示の説明は解剖学第一講座教授山崎春雄が行ったが[201]、26体の発掘・収蔵経緯を示した形跡はない。展示の様子は、『澄宮殿下本学御成写真帖　昭和七年八月』掲載の図61～図63のとおりである[202]。陳列されたアイヌ頭蓋骨数は、図61～図63から判断した。頭蓋骨を載せた箱（トレー）には、前面中央にラベルが貼られている。陳列台の１段目には、説明書きが頭蓋骨陳列の右側に置かれているのがわかる（図63）。

図61　展示風景
（『澄宮殿下本学御成写真帖』７頁より）

図62　展示風景
（『澄宮殿下本学御成写真帖』28頁より）

図63　展示風景
（『澄宮殿下本学御成写真帖』５頁より）

当日配布した目録には次のようにある。

「アイヌ」人ハ北海道本島、千島及ビ樺太ノ一部ニ残存スル孤立セル一人種ニシテ、体質上現代日本人トノ間ニ重要ナル差異ヲ有ス。

「アイヌ」人ノ骨格ノ特性ハムシロ日本石器時代住民ノ骨格ニ於テ甚ダ多クノ共通ノ点ヲ示シ、従ツテ「アイヌ」人ハ本邦先住民族一部ノ生ケル標本ト云フ事ヲ得ベク、人類学上最モ貴重ナル研究資料ニ属スルモノナリ[203]。

この説明文の眼目は、現代アイヌは「本邦先住民族一部ノ生ケル標本」、「貴重ナ研究資料」という点にあった。

山崎春雄が「日本石器時代住民ノ骨格ニ於テ甚ダ多クノ共通ノ点ヲ示シ、従ツテ「アイヌ」人ハ本邦先住民族一部ノ生ケル標本」と記したことは、児玉作左衛門が、アイヌを古代西洋人と共通する特徴を有していると後に述べたこととは対照的である。

２－２．昭和天皇への「御進講」（1936年９月28日）

児玉作左衛門は、1936年９月28日午後５時から50分ほど、釧路行在所（釧路市男子高等小学校）において「アイヌノ頭蓋骨ノ研究」について「御進講」を行った[204]。昭和天皇は、陸軍特別大演習（1936年10月２日～10月５日）に先立って、1936年９月26日に室蘭に上陸し、10月10日まで北海道内各地を巡幸中であった。

児玉作左衛門の釧路行に同行した渡辺左武郎（解剖学第二講座助手）は、次のように回想している。

……北大の各学部の新進教授が御進講することになり、医学部からは児玉先生が選ばれて、釧路行在所においてアイヌの人類学について御前講演を行なうことになった。その際、代表的なアイヌ頭蓋骨を天覧に供することになり、私が先生のお伴をして釧路に赴いた[205]。

渡辺左武郎は別の回想で、次のように述べている。

それまでに教室で集めたアイヌ頭蓋骨の計測と観察を完了しなければならなくなり、当時の伊藤〔昌一〕助教授を長とし、榊原〔徳太郎〕君と一期下の半沢信一君と私の四人がアイヌ研究班となり、毎日夜おそくまで計測や統計的処理に取組んで、どうやら予定通りに研究を完了することができたのである。

児玉教授の御前講演は、釧路の行在所で行われることになり、お伴には天覧に供する頭蓋骨〔4個〕と図表〔図13枚、表24枚〕を携行して私がついていくことになった[206]。

「御進講」の概略は以下のようであった。

「アイヌ」ハ、ソノ原始的ナル生活ト特異ナル体質トニヨリ、ソノ周囲ニ住ム人種トハ著シク異ナレル特殊ノ古代民族ニシテ、人種学上ニ於ケル所属ニ就イテハ数多ノ説アリテ、未ダ決定ヲ見ズ。或ハ古代「アジア」人種、或ハ欧洲人種、或ハ人種ノ孤島ナリトモ謂ハル。次ニ、「アイヌ」ト大和民族トノ関係モ亦分明ナラズ。即、日本石時代人ハ或ハ「アイヌ」ナリト謂ハレ、或ハ然ラズト謂ハル。而シテ之等ノ問題ノ解決ニハ、先ヅ「アイヌ」夫レ自身ノ体質ノ闡明ヲ最モ必要トナスモノナリ。

本研究ハ、北海道帝国大学医学部解剖学教室ノ蒐集セル四百余個ノ「アイヌ」ノ頭蓋骨中ヨリ、落部「アイヌ」ノモノ八十一箇、八雲「アイヌ」ノモノ百二箇、長万部「アイヌ」ノモノ二十六箇並ニ浦幌「アイヌ」ノモノ四十四箇ヲ選ビテ、次ノ二項ニ就イテ行ヘル研究業績ナリ。ナホ本資料中ニハ、慶応元年箱館駐在英国領事館員ガ落部ニ於テ掘発セル、歴史的ノ十三箇ノ「アイヌ」頭蓋骨モ含マレタリ。

一、「アイヌ」ノ頭蓋骨ノ人類学的計測（表十一枚）

之ハ頭蓋骨ヲマルチン計測法ニヨリテ計測シ、且ツソノ示数ヲ算出セルモノニシテ、約二百項目ニ互（ママ）ルモノナルガ、茲ニハ就中重要ナル十一項目、即、頭蓋地平周、頭蓋最大長……ノ数字ヲ挙ゲタリ。ナホ上記ノ四地方ノ「アイヌ」ノ頭蓋骨ニ於ケル計測ヲ、従来本邦ノ学者ニヨリテ発表セラレタル、北海道並ニ樺太「アイヌ」、津雲貝塚人、畿内、北陸、九州日本人ニ就イテノ計測ト比較セリ。

二、「アイヌ」ノ頭蓋骨ニ現ハレタル発育異常（表並ニ図各十三枚）

之ハ頭蓋骨ニ現ハルル諸種ノ発育異常ノウチ次ノ十三種、即、第三後頭髁、舌下神経管二分、傍髁状突起……ヲ取リテ、其ノ出現率ヲ上記ノ四地方ノ「アイヌ」頭蓋骨ニ就イテ観察し、之ヲ和人並ニ他ノ人種ノソレト比較セルモノナリ。

「アイヌ」ノ頭蓋骨ノ形態学的特徴ヲ要約スレバ、略々次ノ如シ。即、ソノ頭蓋地平周並ニ最大長ハ甚ダ大ニシテ、他ノ民族ノソレヲ遙カニ凌駕シ、和人並ニ本邦石時代人ノ短頭型若クハソレニ近キニ反シテ、殆ド長頭型ニ属ス。又、頭蓋高ハ比較的小ニシテ、前頭部ハ後方ヘ傾斜セリ。……次ニ「アイヌ」ノ頭蓋骨ニ現ハルル発育異常ヲ見ルニ、比較的原始的変異ニ富ムノミナラズ、ソノ出現率ハ著シキ部落的差異ヲ伴ヒ、且ツ又他ノ人種ノソレニ比シテ両極端ノ偏倚ヲ示ス。……ソノ成因ニ就イテハ、「アイヌ」人種ノ原始人的特殊素因ト共ニ、狭キ範囲ニ於テ反復セル、長年月ニ互（ママ）ル親近交配ガ、ソノ形成過程ニ及ボセル影響ヲモ考慮スベキモノナリト信ズ[207]。

ちなみに、1936年9月30日には帯広行在所において工学部教授浅見義弘が「高周波電気現象ト其応

用」、10月２日には札幌大本営において理学部教授内田亨が「北海道産ヒドロゾア類」、10月６日には札幌行在所において農学部教授手島寅雄が「作物生育促進ニ関スル最近ノ研究」と題して、「御進講」を行った[208]。

２－３．昭和天皇の「天覧」（1936年10月８日）

1936年10月１日～６日までの間、北海道帝国大学農学部に大本営がおかれ、大演習終了後も10月９日まで行在所がおかれた[209]。

大本営には、附属図書館所蔵明治天皇行幸記録・古地図等50点、研究業績７点を陳列して「乙夜の覧」に供するとともに、数名の教授には説明する機会が与えられた[210]。

1936年10月８日午後２時過ぎに、中央講堂２階御座所において、日本学術振興会学術部第八常置委員会第８小（アイヌ）委員会委員である有馬英二・越智貞見・今裕・山崎春雄・児玉作左衛門は「単独拝謁」を許された。また、伊藤昌一も「列立拝謁者」の一人に選ばれた[211]。

その後、天皇は、理学部講堂において理学部・農学部天覧品を、低温研究室・工学部・医学部においてそれぞれの天覧品について、３時間にわたって見学して説明を受けた。

天皇は、医学部職員・学生約1,200人、大学職員家族約500人が出迎えるなか、午後４時35に医学部に到着し、大野精七医学部長の案内で組織実習室に展示した医学部天覧品14件を見学し、５時５分に退出した[212]。

天覧品中、以下に掲げる２件が、第８小（アイヌ）委員会「アイヌ綜合研究」解剖学部にかかわる研究であった[213]。

「アイヌ」ノ生体写真（山崎春雄）

「アイヌ」ノ頭蓋骨（児玉作左衛門）

山崎春雄は1932年の澄宮「台覧」に続いて、児玉作左衛門は直前の「御進講」に続いて、「天覧」の機会を得たのである。

図64～図65が展示した生体写真・頭蓋骨である[214]。

図64　天覧品「（アイヌ）ノ生体写真」

図65　天覧品「（アイヌ）ノ頭蓋骨」

山崎春雄は、アイヌ18人の台紙貼付写真を各１枚、手札版正面・右側面・右斜方向写真を各１枚供した（図64）。以下は、山崎春雄の説明である。

本写真ハ日本学術振興会ノ補助ヲ受ケ、北海道及ビ樺太ノ「アイヌ」部落ニ於テ撮影シタルモノナリ。「アイヌ」ノ人種的特徴ノ内、頭部ニ於ケル主ナルモノヲ挙グレバ次ノ如シ。

全身多毛ナルコトト共ニ、男子ニハ豊ナル鬚髯ノ発生ヲ見ル。脳頭蓋ハ大キク長ク低ク幅広カラズ。顔ハ幅広ク高サ著シク低シ。鼻ハ幅広ク比較的短カク従ヒテ顔ノ下部大ナリ。

眼ハ深ク凹ミ、従ヒテ鼻根トノ高サノ差大キク、眼ト眉トノ間狭ク、睫毛長ク、上眼瞼ニ蒙古皺襞ヲ有スルモノ極メテ尠キコト等最モ特徴ニ富メル部分ニ属ス。虹彩ノ色モ明ルキモノ稍多キガ多シ。口ハ幾分カ大キク、歯ハ極メテ強健ニシテ摩滅セルモノ多シ、耳翼モ頗ル大ニシテ亦一特徴ニ属ス。

以上「アイヌ」民族体質ノ特徴モ、近年北海道及ビ樺太開拓ノ進展ニ伴ヒ、混血ニヨリ急激ニ和人トノ同化ノ歩ヲ早メツヽアルハ避クベカラザル自然ノ大勢ニシテ、従ヒテ目下ノ急務ハ純粋ナル土人ノ骨格ヲ蒐集保存スルト共ニ、生体ニツキテ写真及ビ計測ニヨリ其ノ特質ヲ記載シ、以テ今後ノ研究ニ資スルニアリト信ズルモノナリ[215]

山崎春雄の用意したアイヌ肖像写真に天皇が見入っている印象を、医学部長大野精七は「殊にアイヌの写真など一々特徴をおつかみになる様に御覧になる」と記している[216]。

児玉作左衛門は、「北海道及ビ樺太「アイヌ」ノ頭蓋骨並ニソノ対照トシテ北海道石時代人、和人及ビ欧洲人ノ頭蓋骨」を「天覧」に供した[217]。図65手前の頭蓋骨13体を並べた説明板には「慶応元年箱館駐在英国領事館員ノ落部ニ於掘撥セル十三個ノアイヌ頭蓋骨」と記載がある[218]。落部発掘の13体に続けて展示してあるのが「北海道石時代人、和人及ビ欧洲人ノ頭蓋骨」である。

児玉作左衛門は、次のように説明した。

……「アイヌ」ノ脳頭蓋ハ甚ダ大ニシテソノ大イ(ママ)サハ他ノ民族ノソレヲ遙カニ凌駕シ、ソノ周囲長及ビ前後径ハ甚ダ大ニシテ、全体トシテ稍細長ク、本道石時代人並ニ和人ノ脳頭蓋ガ短頭型ニ近キニ反シテ、著シク長頭型ニ傾クモノナリ。然ルニ脳頭蓋ノ高サハ「アイヌ」ニ於テハ和人ヨリハ遙カニ低ク且ツ又前頭部ハ後方ニ傾斜セリ。マタ「アイヌ」ノ脳頭蓋ノ縫合線ノ屈曲ハ和人並ニ欧洲人ノモノヨリハ著シク簡単ナリ。

次ニ「アイヌ」ノ顔面頭蓋ヲ見ルニ、和人ノソレニ比シテ顴骨弓幅ハ広ク且ツ顔面高ハ低ク、大体ニ於テ上下ヨリ圧迫セラレタルガ如キ形状ヲ呈ス。マタ眼窠ハ和人ノモノヨリハ広クシテ稍横ニ長ク、鼻高ハ比較的小ナリ。ナホ「アイヌ」ノ顔面頭蓋ニ於テ顕著ナルハ眉間並ニ鼻骨ノ隆起強ク鼻前頭縫合部ノ陥凹セルコトナルガ、之ハ和人ニ於テハ稀ナルコトナリ。マタ「アイヌ」ノ顎部ハ和人ニ比シテ突出度少ク、下顎枝ハ幅広ク、歯牙ハ強靱ニシテ齲歯ハ極メテ尠シ……[219]

なお、陸軍特別大演習・行幸に随行した秩父宮は、日本学術振興会総裁として、1936年10月７日午後８時より、「学術振興会奨励資金受領者」である山崎春雄・児玉作左衛門他３名から「学術研究を御聴取遊はされ」た[220]。

今裕は北海道帝国大学総長として、1938年３月29日、華族会館において開催した日本学術振興会晩餐会に臨席した秩父宮へ、「日本学術振興アイヌ研究委員の蒐集せるアイヌ骨格について」を説明している[221]。

医学部標本庫に収蔵したアイヌ頭蓋骨等は、海外の要人の視察にも供された。1939年１月15日付『北大時報』は、ペルー元大統領ホセ・デ・ラ・リヴァ・アグレロ（José de la Riva Agüero）の視察を次のように述べている。

秘露(ペルー)国元首相リヴァ、アグエロ博士ハ国際文化振興会ノ斡旋ニヨリアイヌ研究ノ為来道ノ途次、一月十四日本学ヲ訪問、午前九時ヨリ午後四時迄博物館、北方文化研究室、医学部解剖学教室標本室(ママ)等ヲ巡覧セリ[222]

２－４．戦後の「天覧」

1953年７月26日、北海道大学は、義宮を医学部標本庫に案内し、児玉作左衛門が収蔵資料の説明をした。その様子を、1953年７月27日付『北海道新聞』は次のように報じた。

……車をつらねて北大農学部に御到着、島学長、各学部長らの御あいさつを受けられてから農学部、低温科学研究所、医学部児玉教室を御見学された。低温研究所では零下三十五度もある低温室へ夏服のまま、約三分間お入りになり周囲の壁や鉄管に真白く凍りついた人工雪〔霜〕に感嘆の瞳を向けられ、また児玉教室では所せまいまでに陳列された先住民族の頭蓋骨や古代の石器、土器などについて同教授から御説明を聞かれたが、父陛下の血をひいて生物学に深い御関心をもたれているだけに、興味深げに御見学された[223]。

同紙は「北大医学部児玉教室の義宮さま」とキャプションを付した写真も載せている。キャプションには、上記記事と同様に「児玉教室」とあるが、説明場所は頭蓋骨等を陳列してある医学部標本庫の２階である[224]。

昭和天皇は1954年の北海道行幸の折、８月22日に北海道大学を視察した。児玉作左衛門は医学部標本庫において収蔵資料の説明を行った。３回目の「栄誉」である。

北海道大学広報誌には「医学部長の御先導により医学部解剖学教室にお入りになり「北海道先史時代の遺物」について児玉教授が御説明をした」[225]とある。

教室日誌の「解剖第一講座（記録）」には、「天皇陛下アイヌ標本室（ママ）に御成り／午後２時半、安保医学部長の御先導にてアイヌ標本室（ママ）に入られた陛下は、わが児玉教授と挨拶をされ、ついで早速に先生の御説明に予定時間延長し15分間にわたり御覧下さる。この間10余の御下問があり、わが児玉教授の明快な御返答に一つ一つうなずかれた御様子であった」とある[226]。

田辺信夫（解剖学第二講座所属）は、「天皇陛下（昭和天皇）がアイヌ小屋を見学にお出でになられるとのことで、夏の暑い中、１週間程小屋の掃除をしたことがあります」と回想している[227]。「アイヌ小屋」とは、もちろん医学部標本庫のことである。

1958年６月23日には明仁皇太子が来学した。「解剖第一講座（記録）」には、次のようにある。

皇太子殿下来室／P.M4.08ヨリ4.32分迄／予定より28分遅れて来室さる。児玉教授と親しく話されること27分間、博学なるに一仝驚く／教授夫人初め、多ぜいの参観者来たる[228]。

新聞は、６月23日に千歳空港到着後「札幌市郊外農林省道農業試験場においでになりご視察を行われ、その後北海道庁、北大本部、同大医学部などをご見学」[229]と報じた。

これらはいずれも、北海道帝国大学・北海道大学が、アイヌ人骨やアイヌ生体写真等、山崎春雄・児玉作左衛門の収蔵資料が、天皇・皇族に供すべき医学部を代表するにふさわしい「研究業績」だと考えていた証左である。もちろん、当時の新聞報道が、アイヌ人骨等の収蔵及び展示を批判的に論じたことは一度もない。

上記の他にも、1954年８月には池田隆政・厚子（昭和天皇第４皇女）夫妻[230]、1955年６月には横綱千代の山を医学部標本庫に案内している[231]。

Ⅲ－３．アイヌ納骨堂建設と供養祭の実施

１．海馬沢博の北海道大学批判と北海道大学医学部の対応

１－１．1980年11月27日付海馬沢博書簡

北海道大学は、1980年12月１日、北海道民族問題研究会代表を名乗る海馬沢博から、1980年11月27日付北海道大学学長宛書簡を受領した。海馬沢博は、児玉作左衛門が「法の手続きを経ないで勝手にアイヌ民族の墓を掘り起し」、人骨1,500体を持ち去った事実は「許されぬ問題」と批判し、次のように要求した。

①アイヌ民族文化資料館（平取町）〔二風谷アイヌ文化資料館〕への、アイヌの血液を採集した際に集めた「アイヌ民族の所有する物具（ママ）」返却
②研究のために集収したものは個人の物になるのかどうか、北大学長の見解表明
③遺族へのアイヌ人骨返却
④海外へのアイヌ人骨売買の内訳公開
⑤副葬品の公開
⑥「アイヌ民族人骨の研究結果」公開[232]

事務局庶務部は、1980年12月４日に医学部事務長補佐に書簡の複写を渡し、事実関係の調査を依頼した。12月８日に、庶務課長は解剖学第二講座教授児玉譲次に電話で海馬沢博からの来翰方を連絡し、海馬沢博から児玉譲次への接触はないことを確認した。同日学長に来翰の旨を報告した。12月11日には医学部事務長補佐から「中間報告」が届いた。12月13日、庶務課長は医学部事務長に、「事実確認方、重ねて依頼」した。医学部「中間報告」は「（別添メモのとおり）」とあるが、所在は不詳である。「重ねて依頼」した「事実確認」（医学部の回答）も不詳である[233]。

事務局庶務部は、1980年12月18日、医学部から得た「中間報告」と「事実確認」（医学部の回答）にもとづいて、以下のような「12月18日　事務局（庶務部長、庶務課長、同補佐、法規掛長）」（メモランダム）を作成した。以下にその概略を示す。

①頭蓋、肢骨が１体となる数　約６割位（モヨロ人（200体）を除く）
②戦後掘ったもの　静内130体（一解で保管）、帯広　70体（児玉教授保管）
③発掘手続　市町村との話し合いで行なった。（文書等証拠物件は無い）、「あずかる」という形を取ったと思う。（さしあげる。もって行って下さい。）
④返却したもの　落部の墓標（13体事件）
⑤研究上の必要性　全て研究上必要である。（返却要求があっても全てを返却することは問題あり）
⑥発掘した町村名　八雲、帯広、日高（静内）が主。
⑦遺物　個人的に購入したもの（函館市への寄附事業）、医学部で管理している土器、石器、金属品は、モヨロ貝塚、北見方面で収集したもの。
⑧血液採集　昭和38年には１人300円払った。児玉作左衛門は、昭和20年代後半に行なった。
⑨海外持出し　なし
⑩売却　なし
⑪学長回答　再検討したい[234]。

いうまでもなく①～⑩が医学部調査の結果であるが、収蔵アイヌ人骨の記録の不備と管理が行き届いていないことを露呈している。

上記メモランダムを作成したうえで、今村成和学長と相談した内容をまとめたのが、以下に全文を掲げる「学長と相談した結果」である。作成時を特定できない。

①一応回答する方針である。
②児玉コレクションをある時期に私物と大学に置くものとを仕分けしたと聞いている。仕分けの基準のようなものが分からないか。